

第9集

よみきかせえほん 適書100選 第9集

適書
100選

2025

よみきかせ
えほん

兵庫県学校厚生会
本をよむなかよし会

兵庫県学校厚生会・本をよむなかよし会

2025

よみきかせえほん適書100選

第 9 集

兵庫県学校厚生会
本をよむなかよし会

は じ め に

（一財）兵庫県学校厚生会では、退職教職員がこれまで培ってきた豊富な経験と知識を活用して、県内各地で「本をよむなかよし会」を開き、子どもたちが本好きになるための読書活動を進めています。1987年度に西宮の1会場から始まり、2024年度には22会場となりました。新型コロナウイルス感染症の流行や児童数の減少、ソーシャルメディアの普及など「本をよむなかよし会」を取り巻く状況が変化する中ではありますが、熱心な先生方のご指導のもと、子どもと保護者の方たちがいっしょになり読書活動を楽しまれています。

本に親しみを持ち好きになることで、考える子どもや心豊かな子どもに育ってほしいという願いのもと、現在に至るまで各会場でたくさんの本が読まれています。子どもたちは「ストーリーにドキドキ」「視界に飛び込む絵にワクワク」「読み手の声にハラハラ」しながら、絵本の世界に引き込まれ、気がつけば感受性や好奇心が育っているように感じています。

『よみかせえほん適書100選』は、これまでの実践活動から、多くの方に特に読んでほしい絵本を選び発行しており、1991年度から2019年度までに8冊の『適書100選』が編纂されました。

このたび、指導される先生方がぜひ読んでほしいという観点で推薦する絵本をまとめた『適書100選・第9集』を作成しました。

掲載された絵本は子どもを対象としていますが、年齢に関係なく愛され楽しめる作品ばかりです。ぜひ書店や図書館で探してみてください。

学校はもとより、家庭や地域において、この『適書100選・第9集』が活用され、本との出会いを通して多くの本好きな子どもが育つことを願っています。

最後になりましたが、この冊子の作成にご尽力いただいた方々や、「本をよむなかよし会」の関係者の皆様に心からのお礼を申し上げます。

2025年2月

一般財団法人 兵庫県学校厚生会

理事長 森戸 卓也

「よみきかせえほん適書100選 第9集」について

- この小冊子は「本をよむなかよし会」の各会場で、指導員の読む絵本のうち、子ども達の反応が良く、もっとたくさん子ども達にも読んで欲しいという思いで多くの絵本の中から100冊を選び編集しました。
5年間コロナ禍などの影響や、開催会場数の減少もあり活動の停止が余儀なくされ、本をよむなかよし会を開く機会が少なくなりました。そこで第9集の編集にあたり、推薦図書の対象を広げるため、既刊の第1集から第8集に掲載した絵本も対象にすることといたしました。いずれの絵本も、指導員の“ぜひ読んで欲しい”との思いが詰まったものです。
- 主に小学校1年生を対象にしていますが、これらの本は3歳程度から年齢に関係なく、幅広く読まれています。
- この小冊子の絵本の配列は、分類別・五十音順にしています。
 - ①日本の創作童話（主として現代の話）
 - ②日本の昔話（創作・民話を含む）
 - ③外国の童話・民話
 - ④理科的な認識を育てるもの
 - ⑤社会的な認識を育てるもの の5分類としました。
 選書は、季節や行事に合わせるのがより効果的です。
- 「子どもといっしょに本を読むことを楽しむ」という思いが込められた「本をよむなかよし会」。わくわくしながら展開を楽しむ子ども達の姿を見て、読み聞かせをおこなう指導員もいっしょに楽しんでいます。スマートフォンやタブレットの普及により、子どもの本離れが進む中、今後も地域の子供達へ、本を読む楽しさを伝えていきたいと考えています。
- この小冊子を参考にして「本をよむなかよし会」の活動がより進み、さらに広がることを期待します。また、家庭でも子どもとともに、本を読む場が増えていくことを願います。
- 本の貸し出しをしている会場では、本を借りて帰る子ども達も増えています。「本も借りられるし、友達もたくさんできて、よかったよ。」そんな声が聞けて嬉しいです。
- 子どもが大好き！ 絵本が大好き！ 表情豊かに聞いてくれる子ども達の顔を見るのが大好き！ そんな指導員が熱意を込めて編集した書です。たくさん読んでくださいね。

一般財団法人兵庫県学校厚生会「本をよむなかよし会」

編集委員長 日高 敬了

第9集 「本をよむなかよし会」実施会場・指導員一覧

神戸

神戸：神戸市教育会館	上野由利子・大東 知子・喜多 晴美・木村 文枝 小林 洋子・高德 妹子・谷口 十絲・西嶋 嘉代 村田 洋一
神戸：成徳小学校	岩本しず子・仲野 麗恵・平島 久子・前川 拓子
神戸：真陽小学校	青木 博江・井上紀久子・倉持 孝子・田中 睦子 丸山喜久子・宮田由美子・山下喜代子
神戸：若宮小学校	廣江 悦子・細見 悦子・森本寿恵子
神戸：御影小学校	板倉 孝枝・小崎佳奈子・浜 松代・日高 敬了
神戸：兵庫大開小学校	赤穂はるみ・久下 順司・末岡 悦子・鈴木かつ子 竹添有美子・竹田 淑子・西川 靖子・福井 礼子
神戸：藤原台小学校	井本 勝代・北野 瑛子・近藤視紀子・安嶋 温子
神戸：小部東小学校	魚田 文子・鍵澤美智子・梶田 治・本城 正也 山口美紀子・吉原 正
神戸：桜が丘小学校	石田 皎子・内田たみ子・黒瀬 仁美・福家 博子

阪神

西宮：高木小学校	加納千香子・木村 光代・谷口 蓉子・鳥屋尾悦子 真鍋 和子
西宮：瓦林小学校	伊賀上ミエ子・小山 早紀・中谷 昌子・山本 秀夫
西宮：段上西小学校	井上由紀恵・渋谷 靖子・長谷川真理子・原田 淑子
西宮：津門小学校	鎌田クニ子・田中佳世子・松村真里子・室田江美子 山下千佳子
西宮：甲東ホール	岡田 和子・林本 恵子

西宮会場は2024年度より下記図書館へ会場が統合されました。

西宮：西宮市立 鳴尾図書館	伊賀上ミエ子・鎌田クニ子・木村 光代・小山 早紀 田中佳世子・山田ミユキ
西宮：西宮市立 中央図書館	中谷 昌子・林本 恵子・松村真里子・室田江美子 山下千佳子

阪 神

尼 崎：潮小学校／ 尼崎市立小田南生涯学習プラザ	田中 千恵・谷田五沙子・長谷川美枝子・前田志津子 峯尾 敦子・室津 晴美・村田比呂子・山田 久子
宝 塚：小浜小学校／ 宝塚市立男女共同参画センター	青木美枝子・近藤 充子・藤田 晴美・細川 洋子 松屋喜三郎・山住栄美子・由良 典子・渡辺 千枝
宝 塚：宝塚第一小学校／ 宝塚市立男女共同参画センター	今井八千代・大林 正治・川島 淳子・倉 孝子 正中 忍・竹村 幸子・田中 依子・松浦 辰子
伊 丹：伊丹市立 総合教育センター	足立 恵子・梅木 節子・大倉 紀子・奥村 恵子 長江 京子・門脇 栄子・後藤 千春・住田ます恵 田中真由美・玉田由三子・福田美世子・藤井 恵子 丸山 佳子・山形 晴子・山田 恵子・山本 真美 横山 明子

東 播

加古川：加古川市立 農村環境改善センター／ 東播活動センター	阿部 忠彦・市川 悦子・乾 善子・大高 忠 大谷 純子・大西なつみ・岡野 鈴代・片岡 清子 古賀 雅代・杉山 明美・高松 朋子・竹内 隆廣 坪井千代子・中村 勝代・丹羽美紀子・福本 典子 前田 功・森岡 尚英・守澤恵理子・柳 正広 山本たか子
明 石：明石出張所	小黒 幸子・川上 和美・木村 雅代・芝野 文子 砂川 悦子・藤尾 敬子・水野千加子・湯本 弥生 吉田 律子
加 東：北播活動センター／ 北播出張所	岸本八千代・菅野 和子・鷹尾 淑子・瀧原 秀子 出井 由紀・長谷川まり子・増田 洋子・山本 佳子 依藤 洋子
小 野：小野市立 コミュニティセンターがわい	稲岡 直美・河島 和子・北山たづ子・田中 道子 藤井 博美・前田 英代・松本 昌子・山本 秀美

中 播

姫 路：姫路市教育会館	石田美智子・浦田 晴美・菅野 敦子・田中 純子 沼田 一女・日和 環・古門美代子・前田きみ代 箭吹美恵子
-------------	--

西 播

たつの：西播活動センター	池田 雅子・尾野 和代・大村 弘美・瀧口 京子 武内 美幸・平形喜代美・吉田 裕子
宍 粟：山崎幼稚園／ まちライブラリー@宍粟	岡本 美紀・川戸 富子・黒田 玲子・下多 睦子 土居 純子・山根 直美

但 馬

豊 岡：豊岡市教育会館	安達 美穂・上田 美幸・組原 祥子・中谷 志保
朝 来：大蔵地区市民会館	赤井一二三・朝倉 式子・上地恵津子・岸本 弥生 小谷 敦子・椿本 政枝・鳥井 生子・原田 智文

丹 波

三 田：三輪会館	今北 米子・小西加代子・森鼻 幸子
丹 波：丹波市立 氷上文化センター	足立 和子・上田 洋子・大西 忍・荻野 京子 田中久美子・徳田 隆代
柏 原：丹波活動センター	芦田ひとみ・足立 紀子・小笠原繁則・荻野真理子 瀧本美恵子・田中 哲代・谷垣 恭子・西田喜代美 藤原 典子・松田 雅子
丹波篠山：ふじわら文庫	荻野多津子・北村 典子・後藤 アヤ・小林まり子 辻 あさみ・西羅 英理・福井 悦子・吉田千佳子

淡 路

洲 本：洲本市総合福祉会館	市坪ひとみ・勘舎 達雄・小西 凱子・篠原 隆子 高田 和子・濱辺 房子・船瀬 芳信
淡 路：稲家記念館／ 淡路市立津名図書館	大月有利子・大山 朱実・梶野 昭子・岸本 美紀 岨 博子・中嶋 明美・中谷 光夫・西川 玉士

※各会場の2020～2024年度の指導員（五十音順）

「よみかかせえほん適書100選 第9集」

編集委員 青木 博江・阿部 忠彦

伊賀上ミエ子・谷口 十絲

日高 敬了

目 次

分類番号

はじめに	1
「よみきかせえほん適書100選 第9集」について	2
第9集 「本をよむなかなし会」実施会場・指導員一覧	3
目次	6
レイアウトについて	9
1. あしによきによき	①・10
2. いいから いいから	①・10
3. うずらかあさんとたまご	①・11
4. おいもを どうぞ!	①・11
5. おかあさん だいすきたよ	①・12
6. おかえし	①・12
7. おつかいさえこちゃん	①・13
8. おっきょちゃんとかっぱ	①・13
9. おっと おとしもの	①・14
10. おはいんなさい えりまきに	①・14
11. おもちのきもち	①・15
12. 怪物園	①・15
13. がっこうに まにあわない	①・16
14. きつねいろの くつした	①・16
15. きみはほんとうにステキだね	①・17
16. 999ひきのきょうだいのおひっこし	①・17
17. きょうりゅうのサン いまぼくはここにいる	①・④・18
18. キリちゃん	①・18
19. くまのしんぶんきしゃ	①・19
20. くれよんのくろくん	①・19
21. ごちそう たべに きてください	①・20
22. こんとあき	①・20
23. しげちゃん	①・21
24. しょうぶだ! ぴゅんすけとぴった	①・21
25. しろくまのパンツ	①・22
26. ぞろりぞろりとやさいがね	①・22
27. たこやきのたこさぶろう	①・23
28. タコやん	①・23
29. だってだってのおばあさん	①・24

30. どうする どうする あなのなか	①・24
31. どすこいみいちゃんパンやさん	①・25
32. とべバッタ	①・25
33. ともだちやもんな、ぼくら	①・26
34. どんぐりのき	①・26
35. にんきもの いちねんせい	①・27
36. ねこ と ことり	①・27
37. ばあばは、だいじょうぶ	①・28
38. ばすくんのくりすます	①・28
39. ばなしくん	①・29
40. ひとりぼっちのミャー クリスマスのよるに THE LONELY MYAA ON CHRISTMAS EVE	①・29
41. ひめじ城ナイト	①・30
42. びゅんびゅんごまがまわったら	①・30
43. ふたごのどんぐり	①・31
44. ぼくがいっぱい	①・31
45. まほうのれいぞうこ	①・32
46. うまかたやまんば	②・32
47. 桂文我のでっち絵本 おしりつねり	②・33
48. 桂米朝・上方落語・地獄八景より じごくのそうべえ	②・33
49. かにむかし	②・34
50. 川端誠落語絵本2 まんじゅうこわい	②・34
51. こぶとり	②・35
52. さんまいのおふだ	②・35
53. ずいとんさん	②・36
54. ソメコとオニ	②・36
55. ひょうたんめん	②・37
56. びんぼうがみとふくのかみ	②・37
57. いたずら きかんしゃ ちゅう ちゅう	③・38
58. いつもちこくのおとこのこ ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー	③・38
59. うしはどこでも「モ〜!」	③・39
60. 王さまと九人のきょうだい	③・39
61. がっこうだって どきどきしてる	③・40
62. クリスマスの うさぎさん	③・40
63. くんちゃんのはたけしごと	③・41
64. こすずめのぼうけん	③・41
65. ごちゃまぜカメレオン	③・42
66. こねこのウィンクルとクリスマスツリー	③・42

67.	シラユキさんとあみあみモンスター	③	43
68.	せかいでいちばんつよい国	③	43
69.	タンタンタンゴはパパふたり	③・⑤	44
70.	てぶくろ	③	44
71.	ねこのピート クリスマスをとどけよう	③	45
72.	番ねずみのヤカちゃん	③	45
73.	プライディさんのシャベル	③	46
74.	ポケットのないカンガルー	③	46
75.	6わのからす	③	47
76.	絵本図鑑1 どうして そんななお？ 虫	④	47
77.	おしりじまん	④	48
78.	おばあちゃんをつくったよ！ おいしいほしがき	④	48
79.	こいぬがうまれるよ	④	49
80.	しっぽのはたらき	④	49
81.	どんぐりころころ	④	50
82.	にらめっこしましょ むっしっし よくみかけるむしたち	④	50
83.	ハートの はっぱ かたばみ	④	51
84.	ハコフグのねがい	④	51
85.	バナナのはなし	④	52
86.	むしばミュータンスのぼうけん	④	52
87.	もぐらはすごい	④	53
88.	エンとケラとブン	⑤	53
89.	きみのことが だいすき	⑤	54
90.	クイールはもうどう犬になった	⑤	54
91.	ぐりとぐらの1ねんかん	⑤	55
92.	十二支のしりとリエほん	⑤	55
93.	新幹線のたび～はやぶさ・のぞみ・さくらで日本縦断～	⑤	56
94.	発見いっぱい！ せかいの こっき	⑤	56
95.	大ピンチずかん	⑤	57
96.	トットちゃんの15つぶのだいず	⑤	57
97.	なまえのないねこ	⑤	58
98.	バスが来ましたよ	⑤	58
99.	へいわってすてきたね	⑤	59
100.	もうすぐおしょうがつ	⑤	59

レイアウトについて

選書
表紙

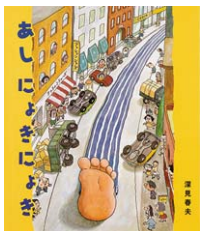
1.	書	名			
(文)	作 者 名				
(絵)	作 者 名				
(訳)	翻 訳 者 名				
	出 版 社 名				

分類番号
○

内容・児童の反応等

考察・特記事項等

注）分類記号 ①は、日本の創作童話（主として現代の話）
 ②は、日本の昔話（創作・民話を含む）
 ③は、外国の童話・民話
 ④は、理科的な認識を育てるもの
 ⑤は、社会的な認識を育てるもの



1. あしによきによき

(作)・(絵) 深見 春夫
岩崎書店

『あしによきによき』という題名に、子ども達が不思議そうな顔をする。全身そら豆色の怪しげなセールスマンから買った大きなそら豆を食べたボコおじさん。その左足がによきによき林へ町へ伸びていく意外な展開に、「次はどうなるんだろう？」とドキドキ感でいっぱいの様子。たくさんの大人達が引っ張っても止められなかった足を、小さな女の子が足の裏『こちょこちょ』すると、するする縮んでいく。鮮やかな結末に、安堵感あふれる表情になった。

不気味さから始まり、息もつかせぬ予想外の展開、あっという間の収束という、スピーディーなお話の運びにひきつけられる。また、足の裏がドーンと出ている表紙や、町へ入ったとたん、足が道路に沿って迷路のように折れ曲がって進んで行くページなど、絵がとても魅力的で、何度も手に取って読みたくなる。

①



2. いいから いいから

(作) 長谷川 義史
絵本館

雷がゴロゴロと鳴って、雷の親子がぼくのうちにやってきた。おへそを取りにきたと分かっているのに、おじいちゃんは「いいからいいから」と、ごちそうしたりお風呂へ入れたり大歓迎。恐縮していたはずの雷だったが、結局、ぼくとおじいちゃんのおへそを取ってってしまう。さあ、大変。子ども達は笑いながらお話にひき込まれていった。絵も楽しくて簡明。

「いいからいいから」何でおじいちゃんは、雷に対してあんなに優しくなのだろう。寛大さやおだやかさ、優しさ。現代人がどこかに置き忘れてしまった一面を、子ども達の心に培うという点で、とても優れた作品である。

①



3. うずらかあさんとたまご

(作)・(絵) 島野 雫
教育画劇

うずら母さんの丸くて小さい卵がころがって行方不明に。見つからず心配する母さん。探すのを手伝おうとヘビ・カラス・オオカミがやって来る。卵を探していると知られたら食べられる…と思い、小さくて丸いものと伝える。協力してくれたみんなは、丸い石・ガラス玉・木の実を持って来てくれた。その親切に、本当は卵を探していると告げて、泣き出す母さん。

みんなでまた卵探しにかけ出す。母さんも追いかけて…あっ、ころんだ！ やっと止まった目の前に大事な卵。「よかった！」温めた卵からひなが…。裏表紙の絵に子ども達の大満足の笑顔が広がる。

正直で愛らしくユーモラスなうずら母さん。思いやり溢れるヘビ・カラス・オオカミ達が個性豊かに登場する。明るい色彩で美しく描かれた草花。自然の中で繰り広げられる心温まる物語。

①



4. おいもを どうぞ！

(原作) 柴野 民三
(文)・(絵) いもと ようこ
ひかりのくに

ある日、くまさんの畑でおいもがたくさんとれた。「ひとりでたべてはもったいない。おとなりさんにもわけてあげましょう。」ということでぶたさんへ。ぶたさんも同様に、おとなりのたぬきさんへ。そして、たぬきさんから次々とおとなりへおいものおすそわけが。最後にねずみさんが1個のおいもを半分にしておとなりさんへ。そのおとなりさんとは、何と最初のくまさんの家だった。

子ども達は、だんだん減っていくおいもから目が離せない。「次はだれ？」「なぜ元にもどったの？」などと、次第に絵本の世界にひき込まれていく。

最後に半分のおいもをもらったくまさんが、なんともうれしそうにうなずく。大きく描かれたくまさんの温和な表情から、子ども達の心に温かい気持ちが伝わる。

①



5. おかあさん だいすきだよ

①

(作)・(絵) みやにし たつや
金の星社

表紙を見せながら表題を読むと、どの子も自分のお母さんの方をチラッと見る。「おかあさんは…っていうけれど…」と読むと、またどの子も自分のお母さんの方を見てニヤッと笑う。「…っていつてくれたら ぼくね もっとお母さんのことだいすきだよ。」と続きを読むと今度はお母さんたちが苦笑い。

同じパターンのくり返しで話は進んでいくが、聞き手は最初から最後まで自分達の日常の姿と重ね合わせ、自分のこととして登場人物と同化していく。そして、最後のページの「うまれてきてくれてありがとう。」のことで、親子が互いに抱きしめ、抱きしめられた思いを抱くことになる。普段の生活の中で実際に発することができていなくても、親子が互いに「だいすきだよ。」という思いを伝え合うことができるほのぼのとした作品である。



6. おかえし

①

(作) 村山 桂子
(絵) 織茂 恭子
福音館書店

たぬきの家の隣へきつねが引っ越してくる。きつねのおくさんは挨拶のしるしとして、かごいっぱいのおこしめを差し出す。たぬきのおくさんはそれを喜んで受け取り、何か「おかえしを…」とたけのこを持って行く。その後、きつねとたぬきの家の間を「おかえし」のやりとりが繰り返される。それぞれの家にある物を「…ほんのつまらないものですが…」とおかえしする。挙句の果てに、ぼうやを、そして自分まで。お互いの家が入れ替わってしまう結末となる。「おかえし」の繰り返しがとても面白い。次は何をおかえしするのだろうとワクワクしながら聞いている。

こどものとも傑作集の一冊。おかえしの、おかえしの…をリズムカルに読みたい。聞いている子ども達もひき込まれて、思わず声をあげてしまうだろう。



7. おつかいさえこちゃん

①

(作)・(絵) 伊東 美貴
偕成社

おばあちゃんの家に泊まりにきたさえこちゃん。おばあちゃんは、大好きなカレーを作ってあげようと、買う物をメモに書いて出かけた。しかし、そのメモを忘れたおばあちゃんは、次々と違う物を買ってしまう。「ちがう」「またちがう」「カレーができない」と心配して声かけをする子ども達。でもさすが、おばあちゃんはカレーよりおいしいシチューを作った。カレーができないとハラハラしていた子ども達も、ようやくホッとする。おばあちゃんのやさしさにふれ、さえこちゃんも、子ども達も笑顔に。ほっこりする話である。

表紙や挿絵がかわいくて、見ていても楽しい。買物といってもスーパーで買物くらいしか経験がない子ども達にとって、商店街を歩き回って買物をするさえこちゃんとおばあちゃんの姿は、とても興味深いものである。



8. おっきょちゃんとかっぱ

①

(文) 長谷川 摂子
(絵) 降矢 奈々
福音館書店

かっぱのガータロに誘われるままに川の中に入って行き、かっぱのおまつりを楽しむおっきょちゃん。まつりのおもちを食べて水の外のことをすっかり忘れ、ガータロのうの子になって何日も過ぎていく。ある日ふと人間の世界のことを思い出し、ちえのすいご様から教わった「すいかごめのじゅもん」を唱え、水の外の世界に戻っていくという、現代版うらしま太郎の話である。ユーモラスなかっぱ達のおまつりの風景と共に、おかっぱ頭、下駄ばきのおっきょちゃん。白い割烹着のお母さん。障子の外の縁側に転がるすいかの皮、くつぬぎ石…。どこか郷愁を覚える昭和の日本の夏の原風景をぜひ子ども達に見せてやりたい。

川で泳いだ経験のない子ども達に、「かっぱが出てきて誘われても、絶対ついて行ったらダメですよ。」と念押ししておいた。



9. おと おとしもの

①

(作) 五味 太郎
福音館書店

おもちゃのトラックの半分を落としてしまった男の子。それを探しに戻る途中、いろいろな物が落ちていて、それを探している人にも出会う。はてさて、探し物は見つかるだろうか。

ページごとに様々な仕掛けがあり、いろいろな物を見つねながらみんなで楽しめる。

絵本の隅から隅まで見落とさないように見入る子ども達。お話が終わると必ず「もう一回見たい！」と声があがる。再びページをめくると、子ども達は自分の探していた物を見つけて「あったあった」「ここにあったんかぁ」という声が聞こえてくる。ゲーム感覚で楽しめる。



10. おはいんなさい えりまきに

①

(作) 角野 栄子
(絵) 牧野 鈴子
金の星社

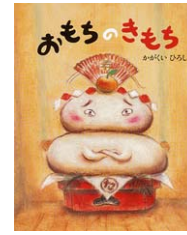
りっちゃんは元気な女の子。

お天気のいい日ももちろん、風の日だって雪の日だって外遊びを楽しむ。でも、雨の日は…。りっちゃんは編物をする。

ながいながいえりまきを編んだりっちゃんは、ぐるぐるまいておさんぽに。寒さでふるえている人達を次々にえりまきの中へ。でも、やっぱり寒い！

最近は、公園で遊ぶ子ども達を見かけることが少なくなった。寒い日はなおさらだろう。

でも、寒い日には寒い日の楽しみがあるはず。子どもは風の子。元気に遊ぶ子どもの姿が見たい。



11. おもちのきもち

①

(文)・(絵) かがくい ひろし
講談社

お正月に食べたふっくらとやわらかく伸びるおもちを、子ども達と共にまず心に思い浮かべた。「このお話は、食べられる『おもちのきもち』を書いた絵本です。」と紹介すると、「えっ？」という顔になり、興味津々で身を乗り出して来た。人間なんかには食べられにくいと、床の間から逃げ出した鏡餅が、一生懸命走り過ぎておなかがかすき、おいしそうな自分を思わず食べる。食べていくうち、顔を伸ばしてカポッと体の端を口に加えたまま冷めて、おもちがドーナツの形に固まってしまう。奇想天外でユーモラスな展開に、子ども達は爆笑の連続だった。

のんびりとした語り口やほのぼのとした「たごさくどん」の表情に、心が癒される。リズムカルな擬音語や擬態語が子ども達の感性にぴったりと合い、心おきなく楽しめる。



12. 怪物園

①

(作) junaida
福音館書店

はるかいにしえの昔から長い長い旅を続ける怪物園。ある夜、その怪物園からたくさんの怪物達がぬけ出し、街の通りを行進し始めた。一方、何日も外に出られない子ども達はすっかり退屈し、空想の旅に出かける。そして、最後にまっ暗やみの深海をさまよっている怪物達を助けたのは…。

暗やみをぞろぞろ行進する怪物達の不気味なページと、段ボールバスや巨大な風船気球で空想の旅を続ける子ども達の明るく楽しいページとのコントラストがおもしろく、ドキドキしたりホッとしたりする子ども達の表情が見てとれる。

すみずみまで細かくていねいに描かれた怪物達や空想の世界の絵にひきつけられ、絵から想像の世界が広がっていく。読み終えた後もう一度開いた表紙からも、新しい世界が広がる。



13. がっこうに まにあわない ①

(文)・(絵) ザ・キャビンカンパニー
あかね書房

8時まで絶対に学校に行かなきゃならない日なのに。そんな日に寝坊してしまって、玄関を走ってとび出す。行く手にいろいろな障害がまっている。

さて、この男の子は学校に間に合うのか。子ども達は主人公に寄りそい、一緒に走っている気持ちになる。間に合いますようにと祈りながら走っている。ドキドキ、ハラハラしながら最後のシーンでホッとする。

スピード感のある文と迫力のある挿絵で、物語の中に自然と入っていけるのが良い。見開きごとに1分が過ぎていく挿絵の工夫により、一層絵本にひきつけられる。



14. きつねいろの くつした ①

(作) こわせ たまみ
(絵) いもと ようこ
ひかりのくに株式会社

きつねのこんたは人間の子のように、クリスマスプレゼントがほしいがくつ下がない。そこで自分がくつ下に化けて待つことにした。眠っていると何かが入ってきたのできつねにもどったが、また眠ってしまった。朝、目が覚めてびっくり！女の子のうさぎをしっかりとかがえていたからである。さてどうなるのが興味津々。

「くるりん ぱっ！」とくつ下に化けるリズムと、あどけないこんたの表情に、子ども達の顔もにこやかで楽しそうである。子うさぎがくつ下にもぐりこんだときは、「えっ」とドキドキ、ワクワクがとまらない様子である。

こんたのかわいらしさと素直な心を感じる中で、友達という最高のプレゼントをもらったこんたと一緒に喜び、ほっこりした気持ちを味わうことができるやさしい絵本である。



15. きみはほんとうにステキだね ①

(作)・(絵) 宮西 達也
ポプラ社

あばれん坊でいじわるなティラノサウルス。ある日、スティラコサウルス達をいじめていると、がけがくずれてティラノサウルスは海へまっさかさまに。泳げないティラノサウルスは、もうだめだと思いながら、「だれか助けて」と叫ぶ。その時、海の恐竜エラスモサウルスに助けられ、生まれて初めて「ありがとう」と言うティラノサウルス。それから二人は友達になり、いつも一緒に過ごした。ある日、ティラノサウルスがプレゼントの赤い実を持ち、海のそばで待っていた。しかし、いつまでたっても現れないエラスモサウルス…。心配そうに話を聞いている子ども達の表情が印象的だ。

いじわるな恐竜がやさしい恐竜と友達になり、「きみはほんとうにステキだね」と言われるような恐竜に変わっていく。その様子は、子ども達の豊かな温かい心を育んでくれることだろう。



16. 999ひきのきょうだいのおひっこし ①

(文) 木村 研
(絵) 村上 康成
ひさかたチャイルド

999匹のかえるの兄弟が大きくなり、小さな池はぎゅうぎゅうになって大騒ぎ。そこで、引っ越しをすることになった。途中、へびやとんびに出会うも999匹のかえるの兄弟の好奇心旺盛な行動に、目にはせない子ども達。お父さんがとんびにつかまえられ、みんながひとつに連なって空高く上がっていく情景に家族のつながりを感じる。そして、1001匹の絆もろとも池の中に落ちてしまったところが、新しいおうちの中というハッピーで優しい本である。

999の数字に子ども達は元気よく反応した。また、「999ひきのきょうだいは」「999ひきのきょうだいも」の繰り返しが多く出てくるので、この部分を子ども達に読ませると一体感が感じられた。



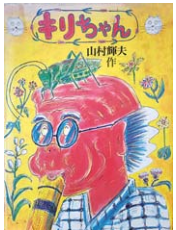
17. きょうりゅうのサン いまぼくはここにいる

①④

(文) かさい まり
(絵) 星野 イクミ
(監修) 小林 快次
アリス館

ずっと昔、38億年前に地球上に生命が誕生したと言われている。それから長い間、命は引き継がれている。恐竜のサンは、恐竜達が我が物顔で存在していた時代に生まれた。兄弟を守りながら必死で生きていた。ティラノサウルスに追われ、海の中に逃げ込んだ時に、アンモナイトのパキと心を通わせ友達になった。土の中で長い長い眠りについていたが、時を経て発見されたのだ。眠りから覚めたサンは、博物館に展示され、たくさんの子どもやおとな達が訪れてくれるのを楽しんでいる。

丹波市山南町川代公園近辺で、2006年8月に丹波竜が発見され、子ども達も目を輝かせて恐竜に興味を寄せた。「ちーたんの館」が開館してからは、丹波竜をより知ろうと多くの親子が展示を観に訪れて、古代恐竜へのロマンを膨らませている。



18. キリちゃん

①

(作) 山村 輝夫
小学館

北国の小さな町に、たったひとりネコと暮らしているおじいさんの、夏から冬にかけての物語である。なかよしだったおばあさんがなくなり、そのおばあさんが手入れをしていた庭の花を見ながら、尺八を吹くのがおじいさんの楽しみ。ある日尺八を吹いていると、キリギリスが鳴きはじめ、すっかり仲よしになったおじいさんとキリギリスのユーモラスで、心温まるお話である。

おじいさんが尺八を演奏する場面が楽しい。実際に、尺八を持ってきた子ども達に見せた。残念ながら、音を出すのはむずかしく、フーフーと音にならないのだが、日本の伝統的な楽器にもふれ、興味津々の子ども達であった。



19. くまのしんぶんきしゃ

①

(作) この ひとみ
(絵) いもと ようこ
金の星社

ブランコから落ち、手をけがしてしまった主人公くんちゃん。

くんちゃんは同じく入院していたバクのおばあさんのおなかを見てびっくり。次の日、もっと大きくなったおばあさんのおなかを見て不思議に思い、取材をしてみることに。「取材っていうのはね、相手の話をいっぱい聞くことなんだよ。」というパパの話を思い出し、一生懸命バクのおばあさんの話を聞いたくんちゃん。おばあさんが、自分達のこわい夢を食べて助けてくれたことを知る。おばあさんを喜ばせて、元気になってもらおうと新聞を作り、孫に会わせることができた。

くまの親子の絵がかわいく、表情豊かであり、ページをめくるとにニコニコしてしまう。人のことを思いやる優しさにあふれ、子ども達の心が豊かになるだろう。



20. くれよんのくろくん

①

(作)・(絵) なかや みわ
童心社

人は誰も何かの役に立ちたい、認められたいと願う心があると思う。しかし、そんなシンプルな願いをうまく伝えられない子や、他者の願いに気づくことができない子もいる。そのことを作者は10色のクレヨンを通して表現しているのだ。暴力的な手段に訴えることなく優しい方法で。みんなそれぞれに素晴らしい所があると気づかせてくれるので、ぜひ児童に読んでほしい。

子ども達にとって身近な文房具に命を吹きこんでくれた絵本だ。自分の願いと他者の願いを知り、平和的で前向きな解決方法を考えていく力を育んでほしいと思いながら読んでいる。



21. ごちそう たべに きてください

①

(作) 茂市 久美子
(絵) しもかわら ゆみ
講談社

ごちそうするのが大すきなうさぎは、秋になると木の実を集めて木の葉に「ごちそうたべにきてください」と動物達に手紙を書く。手紙をもらった動物が次々にくるが、ある日、その話を聞いた旅の途中のあさぎまだらというちょうちょがやってくる。何も用意しなかったで、「どうするの?」「ちょうちょがかわいそう」という声が子ども達から聞こえるが、うさぎはふじばかまの花畑に案内するという展開。また、冬になると何もなくなるが、お礼にもらった豆柿を、干し柿にしてごちそうするうさぎのやさしく温かい心を感じてくれるだろう。

あさぎまだらは、南の国に行く途中に兵庫県にも寄ることが知られている。新聞記事を見せると興味深い様子で聞いている。人間社会にも通じる話で豊かな心にしてくれる。



22. こんとあき

①

(作) 林 明子
福音館書店

物心ついた時からいつも一緒だった人形やぬいぐるみと話ができるのは子ども達の特権。相棒のようなぬいぐるみのこんと、遠い町に住むおばあちゃんの家にあきとあきとあきの小さな冒険は、大人でもドキドキする。大切な相棒こんが駄弁を買に行ってもどってこなかったり、砂丘で犬に連れさられたり…。危ない目に遭う場面やハラハラする場面を乗り越えながら、大切な相棒との絆が深まっていくところを感じてほしい。

身近で大好きな相棒と冒険するという、実際にはハードルの高い体験を絵本を通じてできる。生まれた時からたくさんの愛情に包まれて成長していると感じるところ、大切な相棒のために勇気を持つところ、いろいろなことをさりげなく伝えてくれると思う。



23. しげちゃん

①

(作) 室井 滋
(絵) 長谷川 義史
金の星社

「しげる」という名前の女の子が主人公。1年生になるのを楽しみにしていたのに、自分の席には男の子と同じ青色の紙に「しげる」と書かれていた。そのことだけでもショックなのに、それからとはあるごとに男の子のように思われることが多くなった。とうとうお母さんに名前の愚痴を言う。お母さんから「しげる」の上にお兄ちゃんがいたこと、そのお兄ちゃんは赤ちゃんの時に亡くなったこと、滋養という字の「滋」には元気で生きてほしいという願いが込められていることを聞いた。親の願いを知り自分の名前がかわいくなってきたという話。

自分の名前について、その由来を聞くことで、沢山のの人に愛されていることを知り、自分だけでなく他人も大切に出来る子どもに育ってくれることを願っている。



24. しょうぶだ! ぴゅんすけとぴった

①

(作)・(絵) 串井 てつお
PHP研究所

小さな小さな滝がある田んぼのすみっこで、競い合う種類の違う2匹のカエル。ジャンプや泳ぎの得意なトノサマガエルのぴゅんすけと、体の色を変えられ吸盤で張り付くことのできるアママガエルのぴった。自慢比べやののしり合いで、ついにはけんか別れになる。その後、天敵のヘビやコウノトリに襲われかけるが、それぞれ得意技を駆使して助け合い難を逃れる。無事を喜び合い友情が芽生える。

2種類のカエルの特徴をとらえた絵は、カエルの生態が分かり、生き物に興味を持つことができる。のどかな田んぼの中でも、いつ敵に襲われるかわからない大変さから、自然の厳しさを学べる。けんか別れになっても互いに助け合う姿に共感し、友情の大切さを知ることのできる絵本である。カエルの動きを迫力満点に描いた絵も、子どもの興味を引き、それぞれのカエルに愛着を感じるだろう。



25. しろくまのパンツ

①

(作) tupera tupera
ブロンズ新社

「どこにいったんだろう」パンツをなくしてこまっているしろくまさん。なくしたパンツとは一体どんなパンツだったのだろうか。次々出てくるいろんなパンツに、「これは誰のパンツだ?!」と、当てっこしながらページをめくっていく。物語のラストは、あっとおどろく発見が!

「う～ん、やられました!」
パンツをはいた絵本なんて初めて見た。おもしろすぎる。親子みんなで楽しめる絵本である。みんなで笑いたい時におすすめ。あわせて、『パンダ銭湯』もおすすめ。



26. ぞろりぞろりとやさいがね

①

(作) ひろかわ さえこ
偕成社

冷蔵庫の中、台所のすみで忘れられ、古びてしわしわになった野菜達。月夜の晩に、あちらの家こちらの家から、ぞろりぞろりと出てくる。野菜達は今宵の集まりへと急ぐ。人間への逆襲の始まりだ。しかし、人間に仕返しをしようとみんなが盛り上がったその時、ミミズ和尚がおまえ達の心がくさってよいのかと、みなを諭す。崩れた野菜の姿がリアルでかわいい。いたましくも真剣な野菜のうらみ、怒りにうなずく子ども達。最後の和尚のことは、野菜達も子ども達も納得、しんみりした。

擬音語も愉快で、ホラーじみた展開は、最後のページまですると読ませる。つつい放置してしまう野菜の姿は、私達にも思い当たる切実さ。命をいただくことを再考させ、命の循環をユーモアとともにさらっと語り楽しい。



27. たこやきのたこさぶろう

①

(作) 長谷川 義史
小学館

この絵本は、たこやきのたこさぶろうが、おっちゃん経営する鉄板焼き屋から、旅に出ようとするところから始まる。たこさぶろうの家族達が旅に出るのを止めようとするが、「あっし みんなとちがうんでい」「いかせて おくんせー」と頑なに叫ぶたこさぶろう。何故たこさぶろうはこんなにも旅に出ようとしているのだろう。その衝撃的な結末は…? 読んでのお楽しみ!

関西弁で繰り広げられる、たこやき達とのリズムカルな掛け合いが楽しいたべもの絵本。前歯が抜けた子ども達は「一緒だ、わかる!」と言って、とても楽しそう。巻末にはたこやきソングもついてきて、一度読んだらやみつきになる。



28. タコやん

①

(文) 富安 陽子
(絵) 南 伸坊
福音館書店

海からしょうちゃんの家に来てきたタコやんは、ゲームもサッカーも完璧にこなすスーパーヒーロー。公園での決まりを守らないおじさんと犬に、墨をはき撃退する。「タコやん、すっげえ!」の言葉にタコやんは、ユーモアたっぷりに1本足で頭をかいて「それほどでも」と照れる。タコやんとしょうちゃん達が遊びを通して友情を深めていく様子がほのぼのと描かれている。「タコ、骨ないからすき間でも入れる」「タコ、体の色変えられるから、かくれんぼ上手」などつぶやきながら物語を楽しむことができた。

マンガ風に描かれたタコやんは、ひょうひょうとして魅力たっぷり。「ノタコラ、ノタコラ」や「ヌルリンチョ」などタコらしいユニークな言葉も子ども達をひきつける。大勢で伸び伸び遊び、交流を深めていく物語も楽しんでもらいたい。



29. だてだてのおばあさん ①

(作)・(絵) 佐野 洋子
フレーベル館

98歳のおばあさんと一緒に住んでいる5歳の猫のお話。おばあさんの口癖は「だて わたしは98だもの」で、いつも猫の誘いを断っている。99歳のお誕生日の日、ケーキに飾る99本のローソクを買いに行った猫は、途中でローソクを落とし、5本だけになってしまった。おばあさんは「5本だてないよりましさ」とローソクに火をつけて「5さいの誕生日おめでとう」とお祝いをする。次の日、おばあさんは、「だてわたしは5さいだもの」と猫と出掛け、今までおばあさんだからとやらなかったことを存分に楽しむ。そして「来年もローソク5本買ってきておくれ」と猫に言うのだった。

子ども達は、ちょっとしたきっかけでチャレンジするようになったおばあさんにびっくり。おばあさんと猫の会話に癒された。



30. どうする どうする あなのなか ①

(文) きむら ゆういち
(絵) 高畠 純
福音館書店

逃げる3匹の野ねずみとそれを追うやま猫の夫婦が、深い穴に落ちてしまう。困りはて、皆で知恵を出し合い、穴から出る方法を提案する。知恵の出し合いがおもしろく、子ども達も楽しんでいる。穴に水が入り、外に出られたのだが、自分達が、すでに助かったという事実に気づかず、外に出る方法をいつまでも話し合っているという結びである。不思議がる子、面白いがる子など様々であった。

落ちた穴が縦に長く描かれていて、上下に開いていく。深い穴に落ちてしまった5匹の焦りが伝わってくる。

とぼけた抜け出し方法が、そのまま絵に描かれ、子ども達に分かりやすく個性的で楽しい。皮肉な終わり方だが、子ども達はきっと5匹は仲良くなったんだと想像できる面白い本である。



31. どすこいみいちゃんパンやさん ①

(作) 町田 尚子
ほるぷ出版

猫のみいちゃんは、パンやさん。早起きしたみいちゃんが、どすこいどすこいとねむけざましに四股を踏む場面から、パンやを開店するまでを描いている。生地をこね、まるめ、オープンに入れ、店に並べるまで、どすこいどすこいと、やりとげる。子ども達は皆、最後まで集中していた。「四股って何？」の質問に、実際にやってみせると、「おすもうさんのことや。」と理解していた。開店したパンやさんに「だれが買いにくるの？」と疑問に思った子ども達は、最後の場面で猫が買いにくる事がわかり、「犬はこないのかなあ」と想像を膨らませていた。

みいちゃんの表情、動作が大きく描かれ、文章も歯切れよく書かれていて、ユーモアもあり、最後まで飽きさせない内容である。



32. とべバッタ ①

(作) 田島 征三
偕成社

バッタは、恐ろしい天敵から身を守るため、茂みの中でびくびくと怯えながら暮らしていた。ある日、怯えながら生きていくことが嫌になり、堂々と生きていくことを決意し、大きな石の上でひなたぼっこを始める。子ども達の中から、「見つかってしまうのに…。」とのつぶやきが起こる。敵に戦いを挑み、空高く飛べることを知ったバッタは大空に向かって羽ばたいていく。子ども達は、最初こわごわ、続いてドキドキ、最後はホッとした表情で聞き入っていた。

力強く、味のある絵が魅力的な絵本である。大空に羽ばたくバッタの姿から、力強く生きてほしいという願いが伝わってくる。虫の出ってくる季節に楽しむのにぴったりの絵本。また、読み聞かせる時には、バッタがどこにいるのか、今はどういう場面なのかを意識させるため、じっくり絵を見る時間をとるようにしたい。



33. ともだちやもんな、ぼくら ①

(作) くすのき しげのり

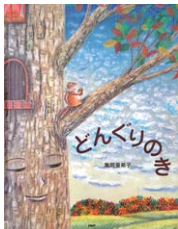
(絵) 福田 岩緒

えほんの杜

三人の男の子がカブトムシを捕ろうと木に登った瞬間、怖いじいさんに叱られ逃げ出したが、一人が転んでしまう。二人は逃げたが、残った友達がひどい目にあわされているのではと心配になり、勇気を出して謝りに戻る。じいさんはそのことを褒め「ともだちというのは、ええもんじゃな。」と言い、みんなを許して、カブトムシもくれた。

カブトムシを捕りたい気持ち、叱られたら思わず逃げ出す気持ちは、子ども達にも十分わかるであろう。逃げ遅れた友達を心配し悩む絵が、大胆に描かれており、子ども達の心にも迫ってくる。

子ども達の日常にありがちな話であるが、「ともだちやもんなぼくら」「そうや、ええときだけのともだちちがうしな」の言葉が子ども達の心に響くことを願って読みたい。



34. どんぐりのき ①

(作)・(絵) 亀岡 亜希子

PHP研究所

初めてどんぐりをつけた若い木の、まだ青い実をリスが食べ、あまりのまずさに、冷やかしの歌を歌った。木は、それから実をつけなくなった。数年後、別のリスがやって来て、この木の穴に住みたいと頼んだが、木は素直に受け入れなかった。諦めずに頼んだリスは、木の素晴らしさや自然の恵みに触れながら素敵な家を完成させた。他のリス達が、冷やかしの歌を歌ったが、この木が季節や天候の変化に優しく接してくれる事や、美味しい実がなると信じている事を力強く話した。その秋、どんぐりの木は、美味しい実をたくさんつけた。

どんぐりの木の表情や季節毎の色彩がよく分かる。木の思いや、リスの明るさ・相手の良さを見つけて認めることの大切さが伝わる絵本である。



35. にんきもの いちねんせい ①

(絵) つちだ のぶこ

小学館

しょうくんは、大きな声で「おはよう」と言える人気者1年生。はなちゃんは、すすんで手をあげる。なかまはずれをしないひろくん。給食当番のうまいさやちゃん。図鑑博士。こまった子を助ける子。生き物の命を大切にする子。仲直りの上手な子。笑顔のすてきな子。「やめて!」と守ってくれる子。そうじ名人…次々出てくる人気者を見つめる子ども達。自分に似た子が出てくるのを待っているようだ。

この本に出てくる人気者のように自分の特技やすてきな性格、一生懸命取り組んでいることを、自分で見つけたり、認め合ったりして、「みんながみんなにやさしくしたら、みんな人気者になれる。」そんなクラスができてほしいと思える本だ。かわいく生き生きと描かれた絵もわかりやすく、ひきつけられる。



36. ねことことり ①

(作) たての ひろし

(絵) なかの 真実

世界文化社

こぶしの枝を束ねるのがねこの仕事。ある日、その枝を探し求めることりが飛んできて…。ねこは1日1本の小枝をわたし、そのお礼にことりは歌うことが、日課となった。約束の7日が過ぎると、ことりは姿をみせなくなる。悲しそうなねこ。それからしばらくして、ねこからもらった小枝で巣を作ることができたことりは、生まれた子ども達といっしょにお礼に訪れた。

挿絵の美しさにも感動。ねこの表情が最初からだんだん変化して、優しくなっていく。ねこの毛のふわふわした温かさや、肉球のやわらかさが伝わってくる。細部まで描かれた植物や、大自然のすばらしさにも注目。環境がちがっても歩み寄る友情に心が温まる。



37. ばあばは、だいじょうぶ

①

(作) 楠 章子
(絵) いしい つとむ
童心社

この本は認知症になったばあばと家族のお話だ。つばさはばあばが大好き、ばあばもつばさがかわいくてたまらない。ところがばあばの様子が少しずつ変化し色々な事がわからなくなり忘れていく。とうとう帰る自分の家がわからなくなり皆で捜す。必死で捜す家族。ばあばを少しずつ理解し優しい気持ちになっていくつばさ。そんなばあばでも、「だいじょうぶだよ」とつばさの頭をなでている。

少子高齢化と言われて久しい。この本は認知症が出始めた祖母と孫を中心に、家族や近所の人の様子がよく分かる。つばさの心の変化やつばさの母の優しい言動など、読む人の心を打つ。ばあばがいる事で家族がひとつになる。文字がやや多いが心を込めて読んであげたい。



38. ばすくんのくりすます

①

(作) みゆき リカ
(絵) なかや みわ
小学館

ばすくんは、壊れて森にすてられた路線バス。昔はお客さんに乗せて走っていたが、今は森の動物達の住まいになっている。ちょうど冬ごもりの季節なので動物達は気持ちよく眠っているはずなのだが、一騒動が起きる。ばすくんの一言「クリスマスというのに…」動物達はクリスマスということばかりとばすくんにあたね、ばすくんも知っている限りの事を話す。クリスマスへの好奇心とその楽しさを感じ、ぐっと話の世界に入ったようだ。

初めて作るクリスマスツリーに、動物達は準備に何日かかける。挿絵から色々な場面が伝わり物語にひき込まれる。ばすくんの助言をもとに、動物達の助け合いや協力、自分の持っている能力を出すことの大切さが伝わってくる。ばすくん、動物達、そして絵本を読んでいる子ども達に喜びを与えるお話である。



39. ばなしくん

①

(作)・(絵) 柴田 ケイコ
PHP研究所

ばなしくんは片付けが苦手な男の子。パジャマはぬぎっぱなし、おもちゃは出しっぱなし…何でもそのままにしまうからこの名がついた。注意されても、いっこうに聞かなかったが、妖怪やごっちゃおばけが現れて次々と大切な物を食べられ、一番大事な愛犬モジャまで吸い込まれてしまったときには、「あっ!」と声をあげる子もいた。妖怪やごっちゃおばけの迫力に圧倒されていた感じだが、モジャを助け出すために必死に片付けをするばなしくんを応援し、無事にかえってきたときには安堵の表情を見せていた。

題名『ばなしくん』と表紙の絵から、「どんな子?」って心惹かれる。一生懸命に片付けをして愛犬を救えた喜びは大きい。その後も愛犬を守るために苦手な片付けを続けているという微笑ましい話である。



40. ひとりぼっちのミャー クリスマスのよるに THE LONELY MYAA ON CHRISTMAS EVE

①

(文)・(絵) たしろ ちさと
(訳) ピーター・ミルワード
女子パウロ会

主人公のねこのミャーは、やせっぽちでみずぼらしい。クリスマスの夜、雪の中を居場所を求めて歩くが、追い立てられるばかり。子ども達は、かわいそうにさみしいだろうとミャーに心を寄せていく。ミャーがサンタのそりの大きな袋の中に隠れた時、それが何か知っている子ども達は、ホッとして笑顔を見せた。だんろの火が燃える温かい部屋で、一緒に眠るサンタとミャーが描かれた最後のページからは、二人の幸せを感じ取ったことだろう。

「たとえ今がみじめでつらくても、希望が見つかる時がきっと来る。」と、あとがきに書かれた作者のことばが、この物語のすべてを語っていると思う。表と裏の表紙のミャーの表情の違いから、偶然の出会いが人生を変えたことが伝わってくる絵本である。ハッピーエンドは本当に嬉しい。絵本の日本語の下に英語訳がついている。



41. ひめじ城ナイト

①

(文) みんつ
(絵) ながせ たいり
金木犀舎

姫路城で暮らす個性豊かな68体のシャチホコ達が、夜になると城内にとび出して大騒ぎをするお話。かけっこ、つなひき、おにごっこ。堀はプール、天守閣まで行く観覧車もある。子ども達は、もはやレジャーランドとなったお城で色々を楽しむシャチホコ達の様子に目が釘付けである。お城やシャチホコ、国宝などの言葉に、ハテナ？の顔をしていた子ども達も、「ウォー。」と声を出しながらお話を楽しんだ。お姫様やお殿様、忍者幽霊も登場し、お城で暮らす時の不便さも描かれていておもしろい。

この絵本は世界遺産30周年の国宝姫路城をお祝いするもの。姫路市の1,251名の子ども達に、もしも姫路城があなたのおうちだったら？というアンケートを取りでき上がった。世界遺産とか国宝とか少し難しいイメージのお城が、楽しい身近なものとなった。



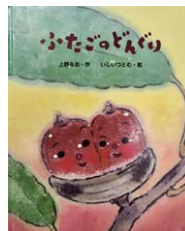
42. びゅんびゅんごまがまわったら

①

(作) 宮川 ひろ
(絵) 林 明子
童心社

こうすけ達は、遊び場の鍵を開けてほしくて校長先生に頼みにいく。校長先生は、びゅんびゅんごまを回せたら考えようと提案する。やっと回せるようになり、勇んで校長室に入るが、そこで目にしたのは、2つのびゅんびゅんごまを同時に回す校長先生の姿だった。そこから、校長先生とこうすけ達のびゅんびゅんごま回し合戦が始まる。段々と難しくなる内容に、最後まで諦めず目標を達成しようとするこうすけ達。子ども達も「がんばれ！」という表情で聞き入っていた。

こうすけ達と校長先生のびゅんびゅんごまを通してのやりとりがおもしろく表現されており、長いお話だが飽きさせない絵本である。また、びゅんびゅんごまの製作の前段階として興味をもたせるのにもよい。



43. ふたごのどんぐり

①

(作) 上野 与志
(絵) いしい つとむ
文研出版

どんぐりが2つくっついた表紙の絵。どんぐりに親しんできた子ども達はどんな話だろうと興味津々。仲良くしていたが、秋が近づくと母親の木から落ち、樫の木として育っていかなければならない。どんぐりの双子は離れることの不安や小動物に食べられそうになる危機を乗り越え、冬の間は温かい落ち葉に守られ、春になると芽を出した。成長してどんぐりを実らせるようになり、何十年何百年と過ぎ立派な双子の樫の木となった。最後の見開きページに大きく描かれた2本の木にホッと温かい気持ちになった。

どんぐりの一生が描かれている絵本。子ども達はどんぐりに同化しながら読み進め、成長を応援している。柔らかいタッチの絵にも希望が感じられる。この一生は人間の一生にも通じるものがあると思え、子ども達にエールを送るのではないだろうか。



44. ぼくが いっぱい

①

(作)・(絵) いもと ようこ
岩崎書店

学校から帰ってくるとお母さんが、次から次に言ってくる言葉がある。主人公のぼくが、「ぼくがいっぱいいたらいいのに…」とつぶやいたところから夢が始まる。ぼくは、現れたぼくそっくりのぼくに次々と用事を頼むと、「はい！」とやってくれる。しかし、楽しいことも他のぼくがしていることに気がついて後悔する。目が覚めて現実に戻ったとき、お母さんが呼ぶ声にぼくは元気よく「はい！」と言えた。子ども達はこの瞬間、夢であったことが分かり目を丸くして聞き入っていた。

子ども達や保護者の方も自分の生活と対比しながら共感したり、いいなあと夢見たりしながらも、最後には現実を見つめるきっかけになる絵本である。やや大きいサイズで見やすく、いもとようこさんのかわいい絵に吸い込まれる。



45. まほうのれいぞうこ

①

(作) たかおか まりこ
(作)・(絵) さいとう しのぶ
ひかりのくに株式会社

家に新しい冷蔵庫がやってきた！顔がついていておしゃべりもする。面白いじゃれで笑わせると、中からおいしいスイーツを出してくれる「まほうのれいぞうこ」だ！どんなスイーツが出てくるかは、お楽しみ。

おはなしが終わるや否や、子ども達は、自分も冷蔵庫を笑わせてやるんだとばかりに、次々とじゃれを考える。柔らか頭の想像力豊かな子ども達。絵本から言葉遊びの世界が広がる。

絵本の中で、パパもぼくもじゃれを言う前には、「ひえひえじゃれ」の歌を歌う。すぐに覚えられるその歌は、楽譜も載っている。何回読んでも、何回歌っても、楽しい。



46. うまかたやまんば

②

(再話) おざわ としお
(画) 赤羽 末吉
福音館書店

夕暮時、峠で馬方はやまんばに追いかけられ、積荷のさかなをすっかり食べられてしまう。それでも恐ろしい形相で追いかけてくるやまんばに、馬も捨て必死に逃げる。子ども達は、追ってくるやまんばにハラハラ、ドキドキ。馬方がやっと逃げ込んだ一軒家は、やまんばのすみかで、はりに上がった馬方と囲炉裏端のやまんばのやり取りがユーモラス。「火の神さんじゃあ、仕方ねえ」と甘酒も餅もあきらめてしまうやまんば。最後に馬方に熱湯で殺されてしまう。

日本の昔話の中でこわい話の一つ。足2本でがったがった走る馬、くらんくらんといねむり、つっぱつっぱと吸う等、昔話ならではのことは、3回の繰り返しや悪者がきちんと罰せられる等、伝承されてきた昔話をきっちり踏まえ再話されている。絵はこわさ、スピード感等格調高く描かれ、安心してすすめられる昔話。



47. 桂文我のでっち絵本 おしりつねり

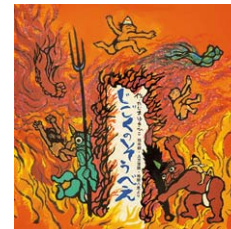
②

(文) 桂 文我
(絵) 北村 裕花
BL出版

丁稚（お店で働く子ども）のつねきちは、とてもよい子。そうじもお使いも嫌がらない。でも、たったひとつ困ったことが。それは、言いつけられた用事をすぐに忘れてしまうこと。今日もだんなさんにお隣への用事を頼まれるが、着いた途端に何を頼まれたのか忘れてしまう。困ったつねきちは、お尻を出して頼む。「わたしのおしりを、つねってください。」

なんと、忘れた用事を思い出す方法は、誰かにお尻をつねってもらうことだったのだ。

落語特有の語り口で話が展開し、子ども達の笑いを誘う。お尻をつねられる場面では、痛そうな表情を見せる子も。また、大きなお尻、おすもうさん、町内の人の顔等、デフォルメされた絵も、この絵本の魅力のひとつだ。



48. 桂米朝・上方落語・地獄八景より じごくのそうべえ

②

(作) たじま ゆきひこ
童心社

綱渡りの最中に命を落としてしまった軽業師のそうべえは、冥土への途中で出会った歯抜き師、医者、山伏と一緒に地獄に送られてしまう。そこで四人は、糞尿地獄や熱湯の釜、針の山に投げこまれるが、それぞれの特技を生かして困難に立ち向かい、無事地獄から生還するという話である。一番うけたのは、糞尿地獄・人呑鬼の場面。子ども達は、そうべえ達のトンチに爆笑し、最後には、「ああよかった」と胸をなでおろしていた。

有名な上方落語「地獄八景亡者戯」を題材に、関西弁を駆使して描かれた、スケールの大きな絵本である。落語ならではのテンポのいい文章は、声に出して読むと、とても心地がよい。また、絵はすべて「型絵染」という技法で製作され、勢いがある。人や鬼がユーモラスに描かれていて味わいがある。



49. かにむかし

(文) 木下 順二

(絵) 清水 崑

岩波書店

おなじみ『さるかに合戦』を木下流に翻案、ひと味違う愉快な昔話に仕上げた。仇討ちに出かける子かのにの集団が、次々と仲間をお供に敵地のサルのみかまで一致団結して行進。がしゃがしゃ、ころころ、ぶんぶん、ぺたりぺたり…と擬音語・擬態語が賑やかに連なり、最後の場面へと息もつかせずなだれ込んでいく。方言まじりの温かい響きは子ども達の耳にすんなりとなじみ、長文ながら真剣な表情でついてきた。そして最後は安堵のため息。

改めて日本語の方言の力強さ、オノマトペの楽しさ・豊かさを感じさせる絵本だ。のびやかでシンプルな絵も素晴らしく、あこぎな仇討ち話も違和感はない。皆で群読するのも楽しい。

②



50. 川端誠落語絵本2 まんじゅうこわい

(作) 川端 誠

クレヨンハウス

古典落語絵本。ひまをもてあました町内の若者が数名集まり、それぞれ嫌いなもの、怖いものを言いあっている。世の中に怖いものなどあるものかという男、しかしまんじゅうが怖いと。一同がからかうと、隣の部屋で寝込んでしまう。こらしめようとまんじゅうを買い集めて、男の枕もとに置く。そのまんじゅうを次々と食べてしまう男。計略にかかった事に気づいた若者達。ほんとにこわいのはなんだ？ 子どもだけでなく皆が笑い、オチを楽しんだ。

日常とは違った落語の世界にとけ込み、その世界を知る機会となった。絵を見る事で、想像をふくらませ、ぐいぐいとひき込まれていったようである。ユーモアを楽しめる。

②



51. こぶとり

(文) 松谷 みよ子

(絵) 村上 康成

童心社

ほっぺたにこぶがある二人のじいさまがおり、めそめそじいさまは泣き事を言い、のん気なじいさまは「こぶも みのうち」と笑い飛ばしていた。のん気なじいさまが木の洞穴で雨宿りし、真夜中に天狗のお隣子に合わせて踊ると気に入られ、明日も来る約束でこぶを取られた。めそめそじいさまは「おらもとってもらうべえ」と泣きながら踊ったら天狗に嫌われ、もう一つこぶをくっつけられた。踊る場面を歌にすると、聞き手も読み手も楽しく味わえた。

こぶとりの本は他にもあるが、この本の二人のじいさまのキャラクターが対比的に描かれているのが、とてもいい。めそめそじいさまは愚痴っぽく陰気だが、のん気なじいさまは明るく楽天的だ。また、絵の背景と色がすっきりしており、人物と景色が丸っぽい線で描かれているので、この本のメッセージも伝わりやすい。

②



52. さんまいのおふだ

(文) 松谷 みよ子

(絵) 遠藤 てるよ

童心社

お寺のこぞっこが、自分のおばさまに誘われたから山へ行くといいので、おしょうさんは困った時に使うように3枚のおふだをくれた。だがそのおばさまは、実は、おそろしいやまんばだったのだ。

やまんばにおいかけられ、つかまりそうなこぞっこ。子どもたちもハラハラ、ドキドキしながら聞いている。ピンチの時におふだを使い、こぞっこは、無事におしょうさんのところにたどりついた。

登場人物もストーリーもわかりやすい日本の昔話。同じ話は講談社や福音館書店からも出版されている。おしょうさんが、やまんばを食べてしまうことにはびっくり。方言や昔話の言いまわしを楽しんで読みたい。会話の読み方、あまだれのうたや、やまんばのうた、やまんばのかけごえなどを工夫して読み聞かせたい。

②



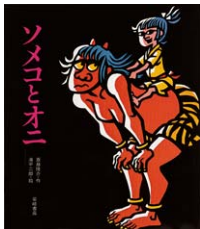
53. ずいとんさん

(再話) 日野 十成
(絵) 斎藤 隆夫
福音館書店

ずいとは山寺の小僧さん。和尚さんの留守を預って本堂の御本尊にお経をあげているずいとんさんを、庫裏（くり・寺の台所）から呼ぶものがある。きつねが庫裏の戸を、尻尾で「ずーい」とこすり、頭で「とん」とたたきいたずらをしていたのだ。ずいとんに追いつめられたきつねは本堂に逃げ込み、御本尊に化ける。ずいとの知恵で化けの皮を剥がされて、きつねは「ケーン」と鳴いて山中へ逃げ戻るのであった。

白梅と紅梅に彩られたページをたどりつつ、物語は展開する。木造の茶色系の堂内に御本尊の台座と経机の朱色が美しい。ていねいに描かれた道具類が山寺の質素な暮らしを物語る。人と生き物の親密なかかわりあい（だましあい）がユーモラスだ。起伏に富んでいて、子どもが自分で読むのに適当な長さだ。

②



54. ソメコとオニ

(作) 斎藤 隆介
(絵) 滝平 二郎
岩崎書店

ソメコは5才の遊ぶことの大好きな女の子。おとな達は忙しいう理由に遊んでくれない。ある日一人で遊んでいるとオニがやってきてオニが住む岩屋に連れてこられる。ソメコは、オニを怖いとも思わず遊ぼう遊ぼうと追いかけて回す。最初は悪い事を企てきたオニも根を上げてしまい、ソメコを襲うこともなく一緒に遊んでやる。

子ども達は、オニはこわい、悪いことをするというイメージを持っている。しかし、ソメコがそんな固定観念もなく、ついにはオニを困らせ、一緒に遊ぶようになる姿に安心感を覚える。オニに対しても親しみさえ感じたようだ。これまで子ども達が持っていたオニのイメージを大きく変える作品である。



55. ひょうたんめん

(文) 神沢 利子
(絵) 赤羽 末吉
復刊ドットコム

昔、種子島に、おとじろうまごじろうという人がいた。ある日、馬をひいて塩を買いに出かける。帰り道、うわさのひょうたんめんというおぼけが出た。「ひえー、でたあ」塩はくわれ、馬もがぶりころりん。つぎこそわしがくわれると、かけてかけて、にげてにげて、小川の松の木によじ登る。それから、まぬけなひょうたんめんを、おとじろうまごじろうが知恵をはたらかせてやつつける。最後は、ひょうたんめん、まっかにゆだってぐんにやり。このあと、村人は安心して、山道を通れるようになった。

1984年に刊行された『ひょうたんめん』を元に、新たな装丁編集で出版されたもの。端的な表現や話しことばが効果的に使われた神沢利子の生き生きとした文章、赤羽末吉のそれぞれの場面にふさわしい巧みで躍動的な挿絵が子ども達をひきつけるだろう。

②



56. びんぼうがみとふくのかみ

(作) 大川 悦生
(絵) 長谷川 知子
ポプラ社

若い夫婦は、貧乏だったけれども一生懸命働いていた。おおみそかに2人が話していると、ちっちゃなじいさんの貧乏神が現れ、家を出て行こうとする。気の毒に思った2人は引き止め、ご飯を食べさせる。そこへ福の神が現れ、貧乏神を追い出そうとしたのでけんかとなったが、家の者は貧乏神を応援した。貧乏神は、福の神を投げ飛ばし追い返してしまった。福の神が落としていった小づちで、貧乏神が宝物などを出し良い正月ができ、貧乏神も福の神になったというお話。

貧乏神と聞けば、不幸をもたらす厄介者とだれもがイメージする。しかし、心やさしい家の者は、貧乏神を大事にするという反対の方向に話が進み、家の者はしあわせに、貧乏神は福の神になるというどんでん返しがあり、その面白さを楽しむことができる。



57. いたずら きかんしゃ ちゅう ちゅう

③

(文)・(絵) パージニア・リー・パートン
(訳) むらおか はなこ
福音館書店

ちゅうちゅうは黒くて小さくてかわいい機関車。機関士のジムや助手のオーリー、車掌のアーチボールドに可愛がってもらって、いつもピカピカ。ある日、ちゅうちゅうは一人で走ったら、もっと速く走れて「素敵！」と感心されると思って逃げ出す。「ちゅうちゅう、しゅっしゅ！」と煙を上げてすごいスピードで走り、信号も無視、はね橋も何とか跳び越えて、ハラハラドキドキ、スリル満点。

ところが廃線に迷い込み、ち、ち……ちゅう！と止まってしまう。子ども達は不安気な様子。最後に無事に帰って、本来の仕事を頑張ろうと決心する神妙なちゅうちゅうに、子ども達は安心する。

画面いっぱいに描かれた白黒の木炭画は、色鮮かなものより一層迫力、スピード感あふれる。乗り物好きの子ども達を強くひきつけ、長い間読み続けられている米国の人気古典絵本である。



58. いつもちこくのおとこのこ ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー

③

(作)・(絵) ジョン・バーニングガム
(訳) たにかわ しゅんたろう
あかね書房

ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシーがお勉強しに行く途中、いろいろな出来事が起こり遅刻する。先生はその理由を信じずいろいろな罰を彼に与えていく。彼は正直にいろいろな出来事をありのままに言うのだが、結果は毎日同じなのだ。そして、何も起こらなかった日にどんでん返しが…。子ども達はお勉強に間に合うために、出発がどんどん早くなっていることに気づいた。そして、どんでん返しの楽しみも。

読み聞かせの後、ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシーという長い名前を呪文のように唱えたり、早口言葉を唱えたりすることがとても楽しそうだった。どんでん返しの楽しさや先生をやっつけるドキドキ感が味わえる。



59. うしはどこでも「モ〜！」

③

(作) エレン・スラスキー・ワインスティーン
(絵) ケネス・アンダーソン
(訳) 桂 かい枝
鈴木出版

国によって鳴き声は違うけど、うしは、どこでも「モ〜！」。同じ動物でも世界中で鳴き声が違うことを知って、まずびっくりするだろう。犬、カエル、にわとり、あひるの鳴き声が違うのに、思わず「へえ〜っ」と声が出てしまう。イギリス、スペイン、フランス、日本の4か国で違うのに、うしは、この4か国に関しては、「モ〜！」と共通らしいと知って、また「へえ〜っ」と驚く。

文章の繰り返しの楽しさ、関西弁のテンポの良さ、絵の面白さ、世界の違いを知る驚きがある。何度も読み返してみたいくなる。また、他の動物は、他の国ではどうなんだろうと考えて、調べたいくなる。日本では月にいるのはウサギだが、国によって違うし、虹も日本では7色だが、国によって違う。温かいユーモアいっぱいの絵本だ。



60. 王さまと九人のきょうだい

③

中国の民話
(訳) 君島 久子
(絵) 赤羽 末吉
岩波書店

中国のイ族の村に住む年寄りの夫婦が、子どもが欲しいと願う。なんと、9人の子どものが一度に生まれ、大きくなる。9人は顔も体つきもそっくり。しかし得意なことが違っている。「ちからもち」「くいしんぼう」「はらっぱい」…。ある日、王様の宮殿の柱が壊れ、それを「ちからもち」が直したことから王様と兄弟たちの対決が始まる。兄弟たちは協力して最後は王様をやっつけてしまうお話。読み聞かせると、3、4人目が登場する頃には「次は〇〇や。」という、子ども達の声が聞こえてくる。お話の世界に夢中になっているのが分かる。

権力を持つ者はそれを奪われるのではないかと恐れ、益々強く支配しようとする。権力を持たない弱い者達は知恵と協力で立ち向かう。そんな対決の繰り返しが面白い。



61. がっこうだって ときどきしてる ③

(文) アダム・レックス
(絵) クリスチャン・ロビンソン
(訳) なかがわ ちひろ
WAVE出版

新しくできた建物に「がっこう」と書いてある。けれど建物は、学校がどんなところか知らない。新学期、いやいや来る子や水をかける子もいて、トゲトゲした気持ちになった学校も、遊ぶ様子や授業の様子を見て、子ども達との生活に慣れ楽しくなってくる。学校での出来事に見ている子ども達も興味津々。放課後、「またきてくれるといいなあ」と言う学校に「もっとがっこうがすきになるよ」と用務員さん。聞いていた子ども達もホッとした表情になる。

「毎日来て、勉強して遊んで、けんがして学校のこと忘れないよ。」と用務員さんに言われて、にっこりその通りと思う学校。学校とはいつまでも思い出とともに心に残る建物なんだと、思い出させてくれる。子ども達にとって、思い出いっぱいのできた建物であってほしいと思う。



62. クリスマスの うさぎさん ③

(作)・(絵) ウィルとニコラス
(訳) わたなべ しげお
福音館書店

クリスマスを待ちきれないデービーは雪の森にお散歩に出かけ、わなにかかったきつねに出会う。助けてやると、森の動物達のパーティーへ案内される。みんなサンタクロースからプレゼントをもらい、デービーも欲しかったうさぎと友達になる。動物達と楽しく遊び、やがて暗くなってきたので、しかの背中に乗って家に帰る。ベッドの中で目を覚ましたデービーを待っていたのは…。

クリスマスイブのわくわく感がとても伝わる絵本である。カラーとモノクロのページが交互に繰り返され、迫力のある絵に、どんな物語の世界に引き込まれ、最後にはちゃんと自分の家に帰ってくる安心感で温かい気持ちになる。読者の熱い支持で復刊された絵本で、これからも読み継がれてほしい。



63. くんちゃんのはたけしごと ③

(作)・(絵) ドロシー・マリノ
(訳) 間崎 ルリ子
ペンギン社

こぐまのくんちゃんは、家の中でもはたけしごとでも失敗ばかり。教えられた様にできない事を経験している子ども達は心配しながらも、くんちゃんがどうするか真剣な表情である。はたけを見てお父さんが大切にしている事に気づき再挑戦する。「よくやったね。」と成長を喜ぶお父さんの言葉で、いち早く花をつんでお母さんに伝えるに行く。くんちゃんの声が聞こえてきそうだ。にこっと笑顔になった子ども達は、大拍手。

こぐまのくんちゃんを主人公にしたシリーズの一冊である。失敗にめげず生き生きと取り組む様子はほほえましく、「しごと」を通して達成感を味わう。その原動力は、お父さんのやさしい眼差しと深い愛情である。成長していく主人公の姿でめくくられ読み手も心温まる。遠くからお互いを見つめる挿絵にも注目したい。



64. こすずめのぼうけん ③

(作) ルース・エインズワース
(画) 堀内 誠一
(訳) 石井 桃子
福音館書店

母すずめから初めて飛び方を教えてもらった子すずめ。うまく飛べたことが嬉しくて、お母さんの言いつけを守らずに、飛び続けているうちに疲れてしまう。休ませてもらう巣を、からす・やまばと・ふくろう・かもと見つけてはお願いする。聞いている子ども達は、「今度は、休ませてもらえるかな。」と期待する。しかしいつも同じように断られる。「子すずめどうなるんやろ。」「暗くなってきたよ。」子ども達の不安が最高潮になった時、心配し、一日中探し続けた母すずめが現れる。「よかった！」子ども達の表情が明るくなった。巣に帰り、母親の温かい翼の下で眠る子すずめ。会場に幸せな空気が流れた。

この本は、親の深い愛情と、安心して休める家庭のぬくもりを読者に味わわせてくれる。



65. ごちゃまぜカメレオン

③

(作) エリック・カール
(訳) やぎた よしこ
偕成社

周りの環境に合わせて、そっと色を変え暮らしているカメレオン。そんなある日、いろんな動物達を見て、あんな風になれたらいいなあと憧れる。ホッキョクグマのような大きな体になり、フラミンゴそっくりのピンクの翼が生え、キツネのしっぽやゾウの鼻まで…カメレオンの体はごちゃまぜになる。ハエも捕れなくなってしまう、もとの体に戻りたいと願う滑稽なカメレオンである。

なりたい夢が叶うカメレオン。欲しいものがどんどん手に入るカメレオン。そんなカメレオンの思いは、子どもにとっても憧れである。しかし、願いのすべてを手にしてもうまくいかない現実と、元の自分に満足する結末のギャップが愉快である。なりたい動物を一目で見られるように、見出しラベルで工夫された本の作りも興味深く楽しい。頁をめくるたびに美しい色彩の変化にワクワクする。



66. こねこのウィンクルとクリスマスツリー

③

(作) ルース・エインズワース
(絵) さとう ゆうすけ
(訳) 上条 由美子
福音館書店

クリスマスが近づいたある日、広間に立派なクリスマスツリーが置かれる。母猫からツリーは見るだけならいいと言われるが、ウィンクルは、なめたり触ったりしたかった。夜、ひとりで広間に行き、ツリーに登るがその大変なこと。てっぺんには妖精の人形がいて、気をつけて帰るように言われる。ウィンクルはツリーを下り始めるが、足をすべらし、思わずつかんだガラス玉と一緒に落ちてしまう。床の上にだけ散ったガラス玉の絵に子ども達は息をのむ。妖精の人形の魔法の杖のお陰で、三度目にやっと、小さいガラスのかげらが、きらきら光る元のガラス玉になる。子ども達は不思議とも思わず素直に喜ぶ。子猫と自分を重ね合わせて楽しむことができた。

絵は落ち着いた色調で画面いっぱいに美しく描かれ、特に子猫の表情が愛らしく魅力的。外国のクリスマスの雰囲気が味わえる。



67. シラユキさんとあみみmonster

③

(作) アンネマリー・ファン・ハーリンゲン
(訳) 野坂 悦子
BL出版

表紙いっぱいの迫力ある黒っぽいmonster。そのmonsterを編んでいるのは、右上にちょこんというヤギのシラユキさん。子ども達はすぐに「あ、編んでる。」と声を上げていた。初めて編んだヤギ達に満足しているところへヒツジおばさんの心ないことば…。そこでmonsterが出てくると思いきや、オオカミが、とび出してあれよあれよの展開になっていく。シラユキさんの気持ちに心を寄せたまま、子ども達は最後まで集中して聞いていた。

編み棒のチキチキ チッキ チッキチキの音とリズムカルな動き、加えてシラユキさんの心臓のドキドキ ドッキ ドッキドキの音、糸をほどく時の軽快な擬音語が効果的で楽しい。シラユキさんの知恵にもにっこりさせられる。最終の終わり方も、ほほえましい。インパクトのある美しい絵もゆっくり味わいたい。



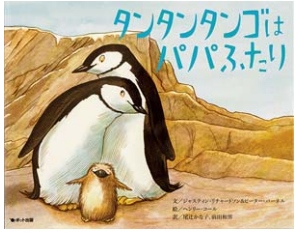
68. せかいでいちばんつよい国

③

(作) デビッド・マッキー
(訳) なかがわ ちひろ
光村教育図書

昔、強い兵隊と大砲を持った大きな国があった。人々は今の暮らしがすてきだと信じていた。大統領は、世界中の人々をしあわせにするため戦争をしに行った。他国は征服され、小さな国だけが残った。小さな国には兵隊がいないので、戦争ができない。その国の人々は兵隊を歓迎し、親しく交流し、兵隊は仕事も手伝うようになった。世界中を征服し国に帰った大統領。彼が歌う歌は、意外にも小さな国の歌だった。戦争をしないで親しくなって行く展開に、ホッとした表情の子ども達。中には一番強い国はと考える子もいた。

明るい色使いで楽しい雰囲気絵とやさしい文章で、子ども達にも親しみやすい絵本である。世界では今もどこかで紛争が続いている。戦争や平和について、直接訴えかける本ではないが、何かヒントになるのではないかな。一度手にとって読んでほしい一冊だ。



69. タンタンタンゴはパパふたり ③⑤

(文) ジャスティン・リチャードソン&ピーター・パーネル
(絵) ヘンリー・コール
(訳) 尾辻 かな子、前田 和男
ポット出版

題名の『パパふたり』というところで、子ども達はということだろうと疑問を持ったようだ。セントラルパークのいろいろな動物の家族の紹介があり、ペンギンのロイとシロが登場する。ロイとシロはどちらも男の子でとても仲良し。一緒に泳いで、一緒に巣作りをして、いつも一緒にいる。ある日飼育員はロイとシロが卵に似た石をあたためていることに気づく。そこで他のペンギンが育てられなかった卵を、そっとふたりの巣の置いてあげる。そして、タンゴが生まれた。タンゴとパパふたりが、一緒に泳いで、一緒に巣に変える姿に心が温まる。

これはセントラルパークで実際にあった話である。多様性が叫ばれる現在、このようにいろいろな家族の形があってもいいということ子ども達に伝えられる。



70. てぶくろ ③

ウクライナ民話
(絵) エウゲーニー・M・ラチョフ
(訳) うちだ りさこ
福音館書店

おじいさんが、森をあるいているうちに、手袋を片方落としてそのまま行ってしまった。

はじめにねずみが見つけてそこに暮らすことに。そこへ、かえるもやってきて「わたしもいれて」と。ねずみは「どうぞ」と入れてあげる。さらに、うさぎ、きつね、おおかみ、いのしし、そしてくまと、次々にやってくる。さて、どうなるだろうか。

動物達のやりとりに、あたたかい優しさを感じることができる。子ども達は、次々に出てくる動物達の「いれて」「どうぞ」の繰り返しをわくわくしながら楽しく聞いていた。

挿絵と文字のバランスもよく、読みやすく、内容もあたたかい民話である。動物を修飾する言葉の繰り返しもおもしろい。



71. ねこのピート ③ クリスマスをとどけよう

(作) エリック・リトウィン
(絵) ジェームス・ディーン
(訳) 大友 剛
(文字画) 長谷川 義史
ひさかたチャイルド

今日はクリスマスイブ！それなのに、サンタさんが風邪をひいてしまい、子ねこのピートがプレゼントを届ける事になった。ピートはミニバスにプレゼントを積み込むと、夜の空へ飛び立った。ピートはプレゼントをねずみの足音よりも静かに置くと、風のような速さで、次々と、世界中の子ども達に届けていった。ピートが不安な時も、初めての事に挑戦する時も、いつも繰り返すことば「クリスマスは しあわせを とどける ひだから やってみよう」そして、おきまりの歌。子ども達はどんどん話の中にひき込まれ、ワクワクしながら展開を楽しんでいるようである。

ピートの表情がかわいくて思わず凝視してしまったり、うまくプレゼントを届けられるのかとドキドキしたり。ピートの一途でポジティブな生き方が魅力的である。



72. 番ねずみのヤカちゃん ③

(作) リチャード・ウィルバー
(絵) 大社 玲子
(訳) 松岡 享子
福音館書店

ドドさんの家には、お母さんねずみと4匹の子ねずみが、こっそりと住んでいた。ところが、末っ子ねずみヤカちゃんの声の大きいこと！とうとうねずみ達が住みついていることがばれてしまった。ドドさんは、あらゆる手段でねずみ達を追い出そうとする。そんなある日、家にどろぼうがやって来た。さあ、大変。ここからヤカちゃんの大声が役に立ち、大活躍の始まり始まり。

番犬は聞いたことがあるけど番ねずみって？ 子ども達の？から話が始まる。お母さんの言いつけに大声で答えるヤカちゃんの返事の繰り返し楽しく、子ども達は「きっと次も」と期待をこめて続きを予想することができる。文字もヤカちゃんの声の大きさに合わせて大きくなり、絵だけでなく文字にも注目することだろう。読み手も聞き手も、ほっこりするお話。



73. フライディさんのシャベル ③

(文) レスリー・コナー
(絵) メアリー・アゼアリアン
(訳) 千葉 茂樹
BL出版

1800年代なかば、ヨーロッパからアメリカに船で渡ったフライディさん、その時一本のシャベルを持ち、希望と不安でいっぱいになりながらも旅をした。フライディさんは、そのシャベルをどのように使っていくのか。アメリカで結婚し、子どもを産み育て、暮らしていく中で、フライディさんのシャベルが使われていく。やがてフライディさんも年を取り、夫も病気でなくす。フライディさんの人生とともに歩んでいったシャベル。現代の暮らしとは違った素朴な生き方をシャベルとともに生き生きと描いている。

メアリー・アゼアリアンの描く絵がすばらしい。力強いタッチで、当時の暮らしを生き生きとあらわしている。絵にもひき込まれていく物語である。



74. ポケットのないカンガルー ③

(作) エミイ・ペイン
(絵) H・A・レイ
(訳) 西内 ミナミ
偕成社

「へえー、ポケットがないの?」と絵本を見たときたん声があがる。お母さんカンガルーは、ポケットがないため、他の動物に教わっておんぶしたり、だっこしたりするがうまくいかない。あるとき、「ポケットを買えば…」というフクロウの提案で、すばらしいポケットだらけのエプロンを手に入れ、わが子だけでなく、他の動物の赤ちゃん達も入れてあげることができた。子ども達は、「よかったー」「お母さんうれしそう!」と大喜びしていた。

お母さんカンガルーの子育てにひたむきな姿は、人間社会に通じるものがあり、感動させられる。

すてきなエプロンを手に入れて、森の小動物達の温かいすみかにして、やさしく世話をする。心豊かにしてくれる絵本である。



75. 6わのからす ③

(作) レオ・レオーニ
(訳) 谷川 俊太郎
あすなろ書房

スイミーで有名な、レオ・レオーニの作品の一つ。農夫と6羽のからすが、自分達のことだけしか考えないため、対立し、いじ悪を仕合う。その様子を見ていた1羽のふくろうが、間に入り、農夫とからす達は話し合うことによって、お互いのことを思いやる解決策を見つける。子ども達には、自分のことも相手のことも大切にしてほしい、そのためには、お互いの気持ちを伝え合うための話し合いが大切だということが、このお話を通して伝わると思われる。また、ふくろうのような役目ができる子どもがでてきてくれることを期待したい。

レオ・レオーニの絵本には、たくさんの気づきがつまっている。『6わのからす』以外の本も、読み聞かせを通して「こんな本もあるよ、読んでみてね。」と紹介すると良いと思う。

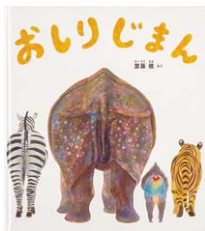


76. 絵本図鑑 1 どうして そんなかお? 虫 ④

(作) 有沢 重雄
(絵) 今井 桂三
アリス館

どうしてそんなに口がくるくるまいているの? 大きなチョウの顔をじっとのぞき込む子ども達。このストローで花の奥の蜜を吸う。ガの大きな触角は、においをキャッチできる。トンボの大きな目は獲物をさがす。クワガタの大きなアゴは? 「戦うため」と声をあげる男の子。ガブトムシの角。夕方でもよく見えるカマキリの目。アリの触角。ストローのようなセミの口。「セミのから見つけたよ」と言う子。虫が苦手と言いつつも興味深くのぞきこむ子。ミズスマシの上下の目。カマキリのアゴ、ハエ、カ、シリアゲハの口。みんな食べるため、生きていくために便利になっている顔…。

大きく描かれた虫の顔のとなりのページには、かわいい絵とわかりやすい文で説明がある。一生懸命生きている虫に興味を持てる本だ。動物の顔、魚の顔の3冊セットの図鑑になっている。



77. おしりじまん

④

(作) 齋藤 楨
福音館書店

丸いおしり、しましまおしり、鹿のおしりのハートの形…。ページをめくるとたびに様々なおしりが出てくる。兎の丸くて小さいおしりの次には象の大きな大きなおしりが現われると「うわあ」と驚きの声が上がります。最後にずらりと並んだ自慢のおしりに、動物達の誇らしげな様子が伝わってくる。動物好きの子が、おしりが出てくる度に動物の名前を言ってくれる。そこで最後にみんなで動物の名前を声に出していくと、満足そうにしていた。

「かおと おしりが おなじいろ」にびっくり。思わず見とれてしまう。ふわふわ、かっちかち、とげとげ等、思いもかけない視点で取り上げられたおしりに興味がわいてくる。

絵はおしりの特徴をリアルに表現し、並べ方も分かり易く工夫されている。文も簡潔で幼児から大人まで楽しめる。



78. おばあちゃんをつくったよ！ おいしいほしがき

④

(文) 宇部 京子
(写真) 細川 剛
ひさかたチャイルド

孫がおばあちゃんと一緒に「おいしいほしがき」を作っていく過程を、わかりやすい文と写真で紹介している。渋柿を知らない子どもも多く、木から取った大きくおいしそうな柿が、渋くて食べられないことに驚く。その渋柿がどんな風においしい干し柿になるのか、子ども達は集中して聞いていた。そして、日なたに干した柿が変化していき、30日干した上に、よりおいしくするためにさらに2週間冷蔵庫で冷やすなど、干し柿を手間ひまかけて作っていることに感心していた。自分でも作ってみたいと思った子もいた。

昔は、秋になると軒下に干し柿をつるしている家を、よくみかけた。干し柿は、古くからある保存食で、貴重な甘味であった。そのままでは食べられない渋柿を、甘くておいしい食べ物に変える昔からの知恵。その知恵の一つに触れることができる。



79. こいぬがうまれるよ

④

(文) ジョアンナ・コール
(写真) ジェローム・ウェクスラー
(訳) つばい いくみ
福音館書店

「いいことおしえてあげようか？ おとなりのいぬに あかちゃんがうまれるの。 いっぴき わたしがもらうんだ！」ということばから始まる。そして2か月後、女の子が引き取るまでが白黒写真を通して語られる。

とても神秘的な命の誕生。誕生した命が大きく育っていく過程を通して、母犬の子犬への思い、子犬の不安や成長を読み取っていき。じっくり見れば見るほど、母犬や子犬の声が聞こえるようである。親から命をもらい、その命を大切に育て、また次の子どもへとつないでいくことを子どもなりに読み取ってほしい。

子犬の表情を細やかにとらえた写真から、生命のすばらしさが伝わってくる。語ることでできない生き物にも命があり、親からの愛情を大きく育ててほしいと願いこの本を薦めたい。



80. しっぽのはたらき

④

(文) 川田 健
(絵) 薮内 正幸
(監修) 今泉 吉典
福音館書店

しっぽにはいろいろな働きがある。物をつかむ、バランスをとる、気持ちを表す、かじをとる、はえたたきやパラシュートの役目をするなど、動物のくらし方や違いによってしっぽの働きがちがってくる。本の構成は、「何のしっぽでしょう」としっぽの絵がクイズのようになっているので、子ども達は楽しく、また得意気に応えてくれる。そして、ページをめくるとその動物の全体の姿と動物名があるので、子ども達の反応や喜びも大きくなる。

子ども達にとって関心のある動物、人間にはないしっぽがそれぞれの動物によって違う働きをしているので興味をもちやすい。



81. どんぐりころころ

④

(監修) 太久保 茂徳

(写真) 片野 隆司

ひさかたチャイルド

子ども達が大好きなどんぐり。でも、どんぐりがどんなふうに見えるのかとか、たくさんの種類があることなど、意外と知らない。ページをめくるたびに、いろいろな種類のどんぐりが、写真で大きく紹介され、「へえ…。」「うわあ。」という声が返ってくる。子ども達の驚きの表情を楽しみながら、読み進めていける本である。

どんぐりの種類や成長の様子、またそのどんぐりを食糧として生きていくかわいい生き物、鳥やりす、ねずみ、ももんがの写真も取りあげられている。食べられた後に残ったどんぐりは、また春に芽を出し、木に育っていく。

生命の不思議やつながっていく生命について、子ども目線で楽しめる本である。



82. にらめっこしましょ むっしっし よくみかけるむしたち

④

(文) よこた いくこ

(絵) よこた きょうご

金木犀舎

「にらめっこしましょ むっしっし このかおは だーれだ」のくり返しを楽しむ。てんとう虫・だんご虫のような身近な虫が出てくる。「にらめっこしましょ むっしっし」は自然に子ども達と声を合わせて読み、期待感一杯で次のページをめくる。口々に虫の名を言い、その通りだと「ヤッター」と歓声をあげる。親も子も読み手も嬉しくなる。またその虫の生息する場所や環境も色彩豊かに紹介されている。

今の子ども達は虫を知っているのだろうかとの思いがあるので、ぜひこの本を読んで虫を身近に感じ興味を持ってほしい。また「にらめっこしましょ むっしっし」のくり返しは、きっと年令を問わずき込まれる。特徴を捉えたアップの顔と鮮やかな色は、子ども達の心をつかむ。読み方の工夫をすると一層楽しめる。



83. ハートの はっぱ かたばみ

④

(文) 多田 多恵子

(絵) 広野 多珂子

福音館書店

春から夏にかけて小さな黄色い花を咲かせるかたばみ。道端、コンクリートの隙間など身近な所に生えていて、3つのハートの形の葉が特徴。朝、明るくなるとハートの葉が開き、太陽の光を浴びて花が開く。夜には、ハートの葉をきっちりと折りたたんでぐっすり眠る。まるで人間の様で親しみがわく。葉には虫や動物から身を守るだけでなく、10円玉をびかびかに蘇らせる酸の力がある。ロケット型の実は、ばねじかけの様な仕組みで、種を遠くまで飛ばす。葉をかんですっぱさに顔をしかめ、びかびかに変身する10円玉に歓声をあげ、飛び散る種に目を見張る。大人も子どもも、この本を読んだ後、ハートの葉っぱ探しに夢中になることだろう。

何気なく眺めていた雑草の知恵、不思議さに触れ、自然の面白さに改めて気づくことができる。



84. ハコフグのねがい

④

(作)・(絵) さかなクン

講談社

さかなクンの待望のかきおろし絵本だ。自分に自信が持てず、まわりをうらやんでばかりいるハコフグちゃんが、海の中でそれぞれを持ち場で自分らしく一生懸命生きている、さまざまな生き物達と出会う。そして、タコさんが喝を入れてくれたことで、最後には、とても大切なことに気づく作品。また、さまざまな魚の生態や特徴を知ることができるように構成されているので、自然科学や生き物への興味が深まる。

この作品には、自分を見つめ直し「自分では気づいていないけれど、あなたのいいところいっぱいあるよ」「あなたは、今のあなたで大丈夫」そんなメッセージも込められている。

前向きな自分になりたいと思う子どもだけでなく、大人が読んで温かく前向きな気持ちになれる。



85. バナナのはなし

④

(文) 伊沢 尚子
(絵) 及川 賢治
福音館書店

何気なく食べているバナナ、意外と知らないことが多いのにびっくり。バナナを食べている時に出てくる白いすじの様なものは、葉で作られた栄養を実に運ぶものとか、バナナには元々、種があったことなど。特にバナナの育つ様子（絵で的確に表現）は不思議。バナナは親の根から出た芽が育ち、葉と葉の間に紫色の花のつぼみの様な「ほう」ができる。「ほう」に守られて小さなバナナの房ができ、大きく育って、緑色から黄色になり、やっと美味しく食べられる。バナナのことを多方面にわたって教えてくれる。

子ども達に話しかける様な文、はっきりした色使い、大きく分かり易いイラストで子ども達をひきつける。「バナナのかわに きずをつけてみよう。くろく うきあがるよ。」の文に、「やってみたい。」との声上がる。幼児から大人まで楽しめる科学絵本である。



86. むしばミュータンスのぼうけん

④

(作) かこ さとし
童心社

ミュータンス菌が虫歯にしていく過程を説明することにより、子ども達に虫歯にならないように気をつけさせたいという願いで書かれた本である。面白いのは、擬人化されたミュータンス菌が、虫歯にしようと活動することである。子ども達は、その表現を面白がりながらも、ミュータンス菌の怖さを感じるであろう。「はみがきやめて、むしばになろう」「はやくむしばだらけになってくれたまえ」とまで言われたら、「ぜったい歯みがきするぞ。」と奮起するにちがいない。

作者は、虫歯の子が多いことを憂い、その犯人は大人、特に親であるとして、反省を求めるためにこの本を書いた。子どもだけでなく、親もいっしょに読んでほしい本である。



87. もぐらはすごい

④

(作) アヤ井 アキコ
(監修) 川田 伸一郎
アリス館

もぐら天国と言われる日本には固有種が8種分布。しかし、もぐらは謎が多く、分かり得たその姿が次々と語られていく。シャベルのような大きな手で、ザクザクすみか（トンネル）を掘る様子や、耳は小さく目は殆ど見えないが、鼻先にあるアイマー器官が世界を詳しく探知する。また、力持ちで大食いのもぐらが、みみずや虫を捕食貯蔵したり、トイレもねどこも完備する等々。ページを繰る毎に子ども達は独特のその生活に驚きと発見が続々。ついには、いとおしい小動物のファンとなって、思わず満面の笑顔がはじける。

シルクスクリーンの柔らかいタッチの絵が、科学絵本にやさしく馴染み、地面の下の見えない世界で、ひっそりとけなげに生きているもぐらの世界を活写した。生物多様性とはよく聞く言葉だが、命に満ち満ちているこの素晴らしい世界を静かに考えさせてくれる。



88. エンとケラとブン

⑤

(作)・(絵) いわむら かずお
あかね書房

エン（悲しみ）ケラ（喜び）ブン（怒り）は、ひろくんの心の中に住んでいる不思議な生き物。ひろくんが、友達の家にはクッキーを届けに行く。途中の出来事のたびに、ひろくんの気持ちからエン、ケラ、ブンの誰が出てくるかを読者にたずねながら話はすすんでいく。ひろくんが転ぶ場面、知らない男の子にとおせんぼされる場面。「エン」が出てくるのかなという時に「ケラ」が出てくる。子ども達は「エンかな」「ケラかな」「ブンかな」と問われるたびに誰が出てくるかを想像しながら聞いていた。考え方の違いで、心の中は変わる。話を聞きながら、ひろくんの心を共有したようだ。

心は、動いている。心の中の感情をエン、ケラ、ブンに託して描いた作品。エンとケラとブンの表情も豊かで、読み終わった後にはどの感情も大切にしたいと思わせる。



89. きみのことがだいすき

⑤

(作)・(絵) いぬい さえこ
PIE International

つぶらな瞳の小さな動物達が登場する。お母さんが短いことばで話しかける。「かなしい きもちはね、ふたを しなくて いいんだよ。」どんな時もどんな状態でもまるごと認めて話しかける。そして体と心をぎゅうと抱きしめる。「おやすみなさい。あのね、だいすきだよ。」と言った時、おだやかな空気が会場を包み込んだ。

自分の存在を全面的に受け入れてくれる周りの人達。その安心感の中で子ども達はすくすくと育っていく。本を読む時は、ゆっくりと落ち着いた声で、子ども達に話しかけるように読みたい。

親からは、「いい本だった。温かい心に包まれた。」「同じ本、買ってきた。何度も何度も読んでやりたい。」という感想があった。



90. クイールはもうどう犬になった

⑤

(文) こわせ たまみ
(写真) 秋元 良平
ひさかたチャイルド

昨今、犬を飼い、家族の一員のように、犬と共に生活している家庭も多い。そのような環境で、犬への愛着・興味関心も強い子ども達に、単なる愛玩だけでなく、視覚障害者を助ける盲導犬の存在は、犬の別の一面を知ることができる。

子犬誕生時から、様々な人達の愛情に育まれながら訓練されていく盲導犬クイールの成長ぶりと、視覚障害者との関わり、障害者を助け、心を通わせるパートナーとの深く尊いつながりは心を打つ。

写真をもとにしたベストセラーの原作は、動物の好きな子ども達の心に響き、犬との接し方を育て、また、視覚障害者への理解を深めることになる。

低学年児にも、中高学年児にも、心に深く入る一冊だと思う。



91. ぐりとぐらの1ねんかん

⑤

(作) なかがわ りえこ
(絵) やまわき ゆりこ
福音館書店

馴染み親しんでいるぐりとぐらと一緒に1年間をひと月ごと・季節ごとに振り返ることができるので、12月最後の会に適している。季節が巡っていく中で、仲間と共に楽しく過ごしている様子を見て、子ども達はゆったりした気持ちになり、話の中に入り込んでいった。読み進めていくうちに、次の月は何かな?と想像し、口々に言葉を発していた。自分の体験と重ねて見たり聞いたりでき、思い出しながら1年間を振り返ることができた。

なかよしの仲間が月ごとに自然の中で楽しく過ごす様子が描かれている。絵からも色々な発見があり、ワクワクしながら読み進めることができる。また、自然の中で工夫をし、助け合って生活していることを登場人物の表情やしぐさからも感じ取ることができる。



92. 十二支のしりとりえほん

⑤

(作)・(絵) 高畠 純
教育画劇

子ども達は、「ねずみ→みつばち→ちょこれーと」と絵と言葉で描かれている表紙にすぐひきつけられた。表紙には、十二の動物達のかわいい顔も描かれていて、「私、ひつじ年」とつぶやく子も。いつの間にか十二支の世界に誘導されている。早速ページをめくると、しりとり形式で順番に十二支達が登場してくる。絵が楽しく言葉もリズムカル。読み進めていくうちに、子ども達も一緒になってしりとりの言葉を口ずさみだした。次にくる言葉は何かなと予想させても面白い。十二支の動物と間をつなぐたくさんさんの言葉を楽しみながら、最後は「じょやのかね→ねずみ」で元にもどる。

年末や新年の季節におすすめの読み聞かせ本である。読み聞かせるといふより、聞き手と読み手が共にしりとり遊びを楽しむ絵本といった方がよい。十二支を楽しく知ることができる点も良い。



93. 新幹線のたび ⑤ ～はやぶさ・のぞみ・さくらで日本縦断～

(作) コマヤスカン
講談社

青森県に住んでいるはるか、春休みにお父さんといっしょに新幹線乗り継いで、鹿児島にいるおじいちゃんのところまで旅をする。新青森駅では真冬の服装で雪深い様子であったのが、鹿児島中央駅では上着を脱ぐほどの暖かさ、桜の花びらが舞っている。絵を見ただけで、日本列島が南北に細長く、地域によって季候や見える景色が大きく変わっていることを実感するだろう。また、沿線の名物や方言などが本文中に散りばめられており、何回も手に取って読みたい絵本である。

低学年の児童でも、日本列島の地理的な知識を得ることができる絵地図は他にもあるだろうが、本書は、小学生の女の子が新幹線で旅をするという物語が中心にある。だからこそ子ども達の心を捉えて離さない。



94. 発見いっぱい！ せかいの こっき ⑤

(文) グループ・コロンプス
(絵) ハマダ ルコラ
ひかりのくに株式会社

100以上の世界の国旗が、大・小鮮やかに描かれている。おさるのウッキー・コッキが相棒のクモッキに乗って、世界中の国旗を見る旅に出かける。国名を付箋で隠して、「知ってる、アメリカ。」「かんごく！」などと当てっこしながら、読み進めるのも楽しい。国旗の色や星・月・太陽・マークなどは、その国の成り立ちや理想宗教、豊かな自然や幸せ、人々の願いを表している。星の数や縞の数にも意味がある。似ている国旗を集めてみるとたくさんあり、子ども達はびっくりする。様々な国旗を見つけながら、世界への興味が広がる一冊である。

オリンピックなどで国旗を目にし、外国に興味をもち、戦争をしている国、災害で困っている国のことを少しでも知る、よいきっかけになりそうである。



95. 大ピンチずかん ⑤

(作) 鈴木 のりたけ
小学館

子ども達は、表紙の絵を見てすぐに大ピンチの意味を理解したようだ。主人公の解決方法を知って「エーッ」「また大ピンチだよ。」とすっかり絵本に引き込まれている。ページを開けていくとそれぞれのピンチレベルまで表示されている。例えば、『バッグのなかですいとうがもれた』は大ピンチレベル51である。子ども達は、「あっ自分もこんなことあったよ。」とか「ママがよくこのピンチになる」などとつぶやいていた。様々な大ピンチにも主人公は、あの手この手でのり越えていく。大ピンチなんてこわくないと子ども達を励ましている。

世の中がコロナ禍にあって本当に人類の大ピンチだった2022年に発行された。生きていくうえでの大ピンチに出あってもなんらかの解決方法があり、新しい出会いもあるよと読む人に伝えている。



96. トットちゃんの15つぶのだいず ⑤

(原案) 黒柳 徹子
(文) 柏葉 幸子
(絵) 松本 春野
講談社

愛犬や家族に囲まれて、毎日安心して幸せな生活を送っていたトットちゃんが、7才の時に始まった戦争のため、爆弾の恐怖や大事な人との別れ、食べる物が無い辛さを味わう。たった15つぶの豆を一日分の食べ物だと渡されたトットちゃんは、おなかがへってお昼に全部食べてしまいたい気持ちと、夜まで残しておきたい気持ちとの間で揺れる。何より嬉しいのは、学校から帰った時に家もママも無事だったこと。そして、東京大空襲で疎開する。

「戦争ほどおそろしいものはありません。平和でなくてはダメなのです。」と言う黒柳徹子さん原案の本だ。辛く悲しかった戦争体験を子ども達に伝える貴重な話だが、松本春野さんの温かく親しみやすい絵によって、優しく語りかける本になっている。この本で、家族や平和について考えてくれることを願っている。



97. なまえのないねこ

⑤

(文) 竹下 文子
(絵) 町田 尚子
小峰書店

表紙の緑色の瞳でじっと見つめる主人公の名前のないねこ。名前がないなんて今からどんな話が始まるのか興味津々の子ども達。本屋や八百屋にいる名前のあるねこ達の紹介。皆、それぞれ表情がリアルに描かれている。生まれてから名前と呼ばれた事がない主人公のねこに女の子が声をかける。その時、ねこは何がほしかったかが分かる。子ども達は最後までじっとねこに集中していた。あたりまえの事への不思議を考えるきっかけになる本である。

名前があるのがあたりまえの感覚が社会の中ではある。個々の識別も出来るし何かと便利である。名前が醸し出す本質は発する人のやさしさが伝わることなのか?! ねこをとおしてそれが伝わる。



98. バスが来ましたよ

⑤

(文) 由美村 嬉々
(絵) 松本 春野
アリス館

『バスが来ましたよ』可愛い声が聞こえてきそうな題名。その下に白杖をもったおじさんと小さな女の子の絵がソフトタッチで描かれている表紙。どんなお話だろうと興味津々の子ども達。

進行性の目の病気から全盲になった和歌山市職員・山崎浩敬さんの実話を元に絵本化したものである。バス通勤をする山崎さんと地元の小学生達との10年以上に及ぶ心温まる交流。最初に声をかけたのは、小学校3年生のさきちゃん。さきちゃん卒業後は、後輩達がその役を引き継いで、山崎さんは無事定年を迎えることができた感動の物語である。会場は、暫くの間物語の余韻に浸っていた。

このお話は、山崎浩敬さんが懸賞作文に応募、「しんくみ大賞」を受賞した事が、新聞・テレビ等で紹介され、作者が取材して絵本にしたもの。助け合いの心の大切さを伝えるのに最適な絵本である。



99. へいわってすてきだね

⑤

(詩) 安里 有生
(画) 長谷川 義史
ブロンズ新社

今、世界では大きな戦争が起こり、子ども達は新聞・テレビ報道で連日悲しいニュースを見聞きしている。我が国でも第2次世界大戦後から今日に至るまで、様々な変容があった。この時期に、平和で暮らせることの大切さをしっかりと考えてほしいと思い、この絵本を選択した。

沖縄に住む小学1年生が素直に力強く書いた平和への思いを、長谷川義史氏が絵本にした。長谷川氏は実際に与那国島へ行って、作者である安里有生さんの通っていた久部良小学校で読み聞かせをした。親子・家族で平和について考えることができる。



100. もうすぐおしょうがつ

⑤

(作) 西村 繁男
福音館書店

「それ、おばあちゃんの家では、やっている。見たことある。」と思わず、絵をおさえにくる子もいた。古き良き日本の年末の様子、お正月の準備を子ども達に楽しく伝えられる。準備の様子は時代とともに変化しても、変わらない新年を迎える人々の気持ちを読み取ってほしい。

絵が細かいところまで丁寧に描写されていて、いろいろな動物が擬人化されて出てくるので、子ども達は引き込まれていく。年末年始のワクワクせわしない雰囲気が再現されている。登場人物の会話から、家族の成長、健康、安全を祈る気持ちが、今も共通する人々の願いとして伝わってくる。読んで気持ちがほっこりする。

よみきかせえほん適書100選 第9集 (五十音順)

	分類番号	ページ
ア	あしにょきにょき……………①……………	10
イ	いいから いいから ……………①……………	10
	いたずら きかんしゃ ちゅう ちゅう ……………③……………	38
	いつもちこくのおとこのこ ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー……………③……………	38
ウ	うしはどこでも「モ〜！」……………③……………	39
	うずらかあさんとたまご……………①……………	11
	うまかたやまんば……………②……………	32
エ	絵本図鑑1 どうして そんなかお？ 虫……………④……………	47
	エンとケラとブン……………⑤……………	53
オ	おいもを どうぞ！……………①……………	11
	王さまと九人のきょうだい……………③……………	39
	おかあさん だいすきだよ……………①……………	12
	おかえし……………①……………	12
	おしりじまん……………④……………	48
	おつかいさえこちゃん……………①……………	13
	おっきょちゃんとかつぱ……………①……………	13
	おっと おとしもの……………①……………	14
	おばあちゃんとつくったよ！おいしいほしがき……………④……………	48
	おはいんなさい えりまきに……………①……………	14
	おもちのきもち……………①……………	15
カ	怪物園……………①……………	15
	がっこうだって どきどきしてる……………③……………	40
	がっこうに まにあわない……………①……………	16
	桂文我のでっち絵本 おしりつねり……………②……………	33
	桂米朝・上方落語・地獄八景より じごくのそうべえ……………②……………	33
	かにむかし……………②……………	34
	川端誠落語絵本2 まんじゅうごわい……………②……………	34
キ	きつねいろの くつした……………①……………	16
	きみのことが だいすき……………⑤……………	54
	きみはほんとうにステキだね……………①……………	17
	999ひきのきょうだいのおひっこし……………①……………	17
	きょうりゅうのサン いまぼくはここにいる……………①・④……………	18
	キリちゃん……………①……………	18
ク	クイールはもうどう犬になった……………⑤……………	54
	くまのしんぶんきしゃ……………①……………	19
	クリスマスの うさぎさん……………③……………	40
	ぐりとぐらの1ねんかん……………⑤……………	55
	くれよんのくろくん……………①……………	19
	くんちゃんのはたけしごと……………③……………	41
コ	こいぬがうまれるよ……………④……………	49
	こすずめのぼうけん……………③……………	41
	ごちそう たべに きてください……………①……………	20
	ごちゃまぜカメレオン……………③……………	42
	こねこのウィンクルとクリスマスツリー……………③……………	42
	こぶとり……………②……………	35
	こんとあき……………①……………	20
サ	さんまいのおふだ……………②……………	35
シ	しげちゃん……………①……………	21
	しっぽのはたらき……………④……………	49

	分類番号	ページ
	十二支のしりとリエほん……………⑤……………	55
	しょうぶだ！びゅんすけとびった……………①……………	21
	シラユキさんとあみあみモンスター……………③……………	43
	しろくまのパンツ……………①……………	22
	新幹線のたび〜はやぶさ・のぞみ・さくらで日本縦断〜……………⑤……………	56
ス	ずいとんさん……………②……………	36
セ	せかいでいちばんつよい国……………③……………	43
ソ	ソメコとオニ……………②……………	36
	ぞろりぞろりとやさいがね……………①……………	22
ダ	大ピンチずかん……………⑤……………	57
	たこやきのたこさぶろう……………①……………	23
	タコヤん……………①……………	23
	だってだてのおばあさん……………①……………	24
	タンタンタンゴはパパふたり……………③・⑤……………	44
テ	てぶくろ……………③……………	44
ト	どうする どうする あなのなか……………①……………	24
	どすこいみいちゃんパンやさん……………①……………	25
	トットちゃんの15つぶのだいず……………⑤……………	57
	とべバット……………①……………	25
	ともだちやもんな、ぼくら……………①……………	26
	どんぐりころころ……………④……………	50
	どんぐりのき……………①……………	26
ナ	なまえのないねこ……………⑤……………	58
ニ	にらめっこしましょ むっしっし よくみかけるむしたち……………④……………	50
	にんきもの いちねんせい……………①……………	27
ネ	ねこ と ことり……………①……………	27
	ねこのピート クリスマスをとどけよう……………③……………	45
ハ	ハートの はっぱ かたばみ……………④……………	51
	ばあばは、だいじょうぶ……………①……………	28
	ハコフグのねがい……………④……………	51
	バスが来ましたよ……………⑤……………	58
	ばすくんのくりすます……………①……………	28
	発見いっばい！せかいの こっき……………⑤……………	56
	ばなしくん……………①……………	29
	バナナのはなし……………④……………	52
	番ねずみのヤカちゃん……………③……………	45
ヒ	ひとりぼっちのミャー クリスマスのよるに THE LONELY MYAA ON CHRISTMAS EVE……………①……………	29
	ひめじ城ナイト……………①……………	30
	びゅんびゅんごまがまわったら……………①……………	30
	ひょうたんめん……………②……………	37
	びんぼうがみとふくのかみ……………②……………	37
フ	ふたごのどんぐり……………①……………	31
	ブライディさんのシャベル……………③……………	46
ヘ	へいわってすてきだね……………⑤……………	59
ホ	ぼくがいっぱい……………①……………	31
	ポケットのないカンガルー……………③……………	46
マ	まほうのれいぞうこ……………①……………	32
ム	むしばミュータンスのぼうけん……………④……………	52
モ	もうすぐおしょうがつ……………⑤……………	59
	もぐらはすごい……………④……………	53
ロ	6わのからず……………③……………	47

2025 よみきかせえほん適書100選 第9集

発行年月日 2025年2月1日

編集・発行者 一般財団法人 兵庫県学校厚生会
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通4丁目7番34号
電話(078) 331-9955(代表)

印刷所 福田印刷工業株式会社
〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4丁目6番3号
電話(078) 811-3131
